2021年6月1日

月刊 もぐら通信

2023年11月1日 第１３２号　初版　http://abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通って
あなただけの番地に届きます

もぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい

『S・カルマ氏の犯罪』の最後に登場する
非ユークリッド空間を映写する映写機

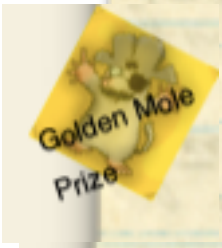
目次

１　目次…page ２
２　記録＆ニュース＆掲示板page ３
３　巻頭詩（１８）若やいだ夜：ボルヘス……page １６
４　周辺飛行（４２）：３。『周辺飛行』について（２１）：周辺飛行４０―蓄音機：岩田英哉…page １７
５　二十一世紀の日本文学のためのスケッチ・ブック（１２）：安部公房の塔と倉橋由美子の塔（２）：岩田英哉……page ２１
６　糞尿と性愛の文学～生殖器・排泄器同一社会論仮説～（３）：１。古事記の中の糞尿と性愛/１.１ 神武初代天皇の皇后（きさき）の出生譚（２）：待て次号：岩田英哉…page ３３
７　ネット・モナド論（１６）：７.４.１ 中国の超限戦の手口について：岩田英哉…page ３４
８　私の本棚（３６）：木田元著『私の読書遍歴　猿飛佐助からハイデッガーへ』を読む～安部公房の明治維新八百長説『榎本武揚』～：岩田英哉…page ３９
８　縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（１５）：５.１６.４　八の音義は何を意味するか（４）：J 道元禅師の超越論：岩田英哉…page ４５
９　Topologyで日本の文化を解説する「内なる辺境シリーズ（１２）：扇：岩田英哉…page ５５
１０　編集後記…page ５６
１１　編集方針……page　５７

もぐら通信

ニュース＆記録＆掲示板

The Best Tweets of the Month

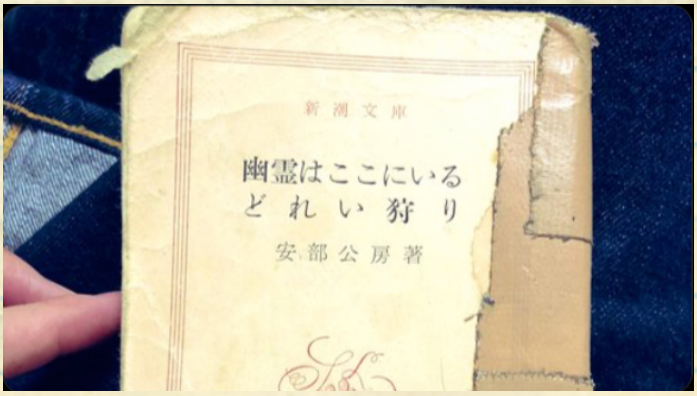


ドクロ軍曹@dokurogunsou·Jun 4
漫画配信サービスで読んだ漫画が安部公房の引用にしかみえなくてずっと考えてる。

しんぶんし@ctdmn_gc·11h
安部公房読むのやめらんないのよーん

川見@kw3tie·Jun 7
安部公房とプリキュアってほぼ同じだよね

某デニム屋店員@w5SN7jDdtlJBiKt·Jun 8
祖母の持っていた安部公房。元はこんなボロくない。汚くしてごめんねー！面白いぞおー、もうすぐ読み終わるぞ



アベキヨ@kiyo_abc·Jun 3
父、安部公房を再読してよかったとのことでどんな話題をふっても安部公房に帰着するメールが返ってくる。

伊東黒雲@Itou_Cocoon·Jun 4
安部公房は本棚にいくらあってもいいですからね

nmdf5@nmdf51·Jun 7
安部公房さんの公然の秘密が読みたくて読みたくて職場帰り。あのページ数でめちゃめちゃ泣いた高校時代。笑う月って名著。

もぐら通信

ヤニパン@yani_pants·Jun 6

Replying to @M041P
内田百閒と夏目漱石の夢十夜！
ひょっとして安部公房とかも読みます？

高笠原さや@saya_tkshr·Jun 3
今日から国語表現の授業で安部公房さんの「赤い繭」学んでるんだけど,1回目読んだ時全く理解出来なかったのに電車の中で2回目読んだら凄く理解できたwいい作品ですLoudly crying face

The worst tweet of the month
つゆはら@tsuyu_hara·11h
安部公房ひとつも読んだことないなぁ　天理先生ってそうだったっけ

今月の一日２４０時間
ホッタタカシ@t_hotta·13h
そして、ヴェーラの勅使河原宏特集で、安部公房脚本の『1日240時間』（1970）をようやく観られました。万博の「自動車館」で上映された4面スクリーンを使っての短編ミュージカル。音楽は佐藤勝で、特撮は円谷プロの高野宏一。アニメーションは白組の島村達雄。

げんきっす@inaizumi94·Jun 6
1970年の大阪万博で4面スクリーンで上映された「1日240時間」は如何にも安部公房らしい頓珍漢な脚本で面白かった。飲めば10倍速で動ける様になる薬を巡る話で、そりゃ悪用する人も出てくるよなと。駄菓子を全部盗まれる駄菓子屋のお婆ちゃんが色々と不憫。

今月のS・カルマ氏
madeleine@storyforf·7h
ぼくの心は体より十メートルほど
先を歩いていたので、もうその椅子に腰を下してほっとしていたのですが、ぼくの体のほうは丁度ドアのところで急にわけの分らぬ変な気分に襲われ立止ってしまいました。

驚いたことに、ぼくの椅子にはもうちゃんと別なぼくが掛けていたのです。
―安部公房「壁―S.カ

今月の終りし道の標べに

madeleine@storyforf·4h
それでも私は言いつづけた。
《とにかく僕には分らないんだ。なぜ僕が、予定表に書き込まれたとおりの僕でいつづけなけりゃならないのか、どうしても分らない……》
――安部公房「終わりし道の標べに」

今月の方舟さくら丸

うたうたいbot@hirari_ktnh·3h
ぼくは桜の花が嫌いだ。闇にたなびく雲のような夜桜のトンネルをくぐったりする時、美しいとは思う。美しくても嫌いなのだ。日本人のなかにあるもう一つの桜のせいだろう。

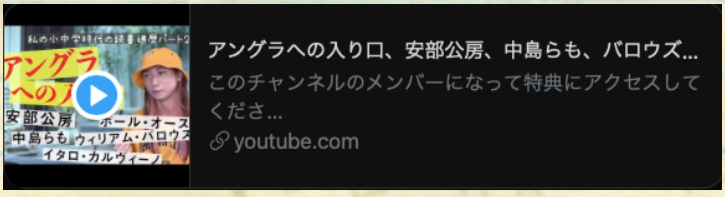
ブタブタ@saitiosuucamera·Jun 3
安部公房『方舟さくら丸』やっと読んだ。 #100分deナショナリズム でやった事を今更知る。録画してあった自分を褒めたい。奇しくもデリーロ『沈黙』と共通テーマ。巨大廃墟を方舟として核戦争を夢見る男(ボンクラの夢だ)屑親父と彼率いる老人右翼カルトとのバトル。映画化希望。

今月の木石岳

木石岳 / Gaku Kiishi / Asahi (macaroom)@asahisism8·Jun 4
オー・ヘンリー読んで感動してたような無垢だったぼくが段々と前衛的なものに興味を持ち始める過程を綴ったドキュメントです。

アングラへの入り口、安部公房、中島らも、バロウズ、そして宮本輝（小中学時代

の読書遍歴） https://youtu.be/Gt1A7BHXMpo via @YouTube



今月の旭川安部公房の会

柴田望@NOGUCHIS7·Jun 6

https://fragile-seiga.hatenablog.com/entry/2021/06/06/183333…

▪「壁　（故郷憧憬）」　柴田望　二〇一七年二月二十五日（土） 旭川市中央図書館主催 「サウンド・音楽による安部公房『無名詩集』朗読会」

今月の落とし穴

おく☆けん@TOKEIWOTOMETE·Jun 5

高橋悠治さんトーク。『おとし穴』音楽録音とその日の宿で語らった武満徹氏との馴れ初めや一柳慧氏との三人の分担、武満、安部公房のエキストラ参加、当時の草月アートセンター、『すさのお異伝』まで続いた勅使河原監督とのご縁と逸話等々、お名前通り悠然と笑顔で語られる高橋さん。#シネマヴェーラ

La_Pirate@La_Pirate·Jun 6

高橋悠治氏のトークの中で『おとし穴』に安部公房本人が死体運搬人で出演していると言う話がありました。サングラスをかけているのであれば、手前の右側の人物なのか？

もぐら通信

今月の勅使河原宏

art&spiritual@artspiritual1·Jun 6
勅使河原宏監督「落とし穴」@シネマヴェーラ渋谷
戦後前衛映画の傑作として名高い作品。全く古びず、今、観ても新しい。

突然の殺し。無人集落に突然現れる人々。ぼた山から見下ろす野良犬の群れ。お菓子にたかる蟻。壁穴から覗く子どもの目。噴き出る汗・・・。鮮烈なイメージと安部公房の想像力！

ホッタタカシ@t_hotta·11h

Replying to @t_hotta
安部公房には『棒』や『なわ』という短編があるが、『1日240時間』は『車輪』という題名になるべきコンセプト。「車輪の発明は、人類の時間感覚を劇的に短縮させた」というテーマが、なぜか「飲むと時間感覚が10倍になる薬・アクセレチン」をめぐる穏やかでないミュージカルに。

ホッタタカシ@t_hotta·11h
勅使河原宏&安部公房『1日240時間』、途中で主役の博士と助手が「もうや〜めた！」とカツラを脱いで暗転するが、観客席のゲバルト学生がスクリーンを引き裂き、二人の顔を露出させる展開は、脚本にない。寺山修司の短編『ローラ』に先駆けたメタフィクションを万博展示映像でやってんだなぁ。

Toshimi Yoshida@NeverGirls·Jun 6
シネマヴェーラ勅使河原宏特集で、安部公房脚本「おとし穴」の音楽を担当した1人、高橋悠治のアフタートーク。戦後の前衛芸術の発信地で、お金のない才能ある若者たちが集まった60年代の草月アートセンター。ユーロスペースは、その継承を目指して創始されたと知る。今ここでの上映につながっている。

今月の砂の女

石井岳龍 exSOGO ISHII@GakuryuIshii·Jun 1
6月12日（土）13:20「砂の女」上映後トーク、長嶌寛幸さん（音楽家）と登壇させて貰います。この日は安部公房脚本×勅使河原宏監督コンビ全4作（短編「白い朝」含）が上映される。名匠・勅使河原宏の偉業を振り返る！　シネマヴェーラ渋谷でメモリアル映画祭開催 #勅使河原宏 https://eiga.com/l/qNKK2

もぐら通信

今月の人間そっくり

かまぼこ@読書垢@IbqQm·Jun 4

安部公房「人間そっくり」

狂気を感じる作品。突然火星人を名乗る男に訪問されます。火星人そっくりの地球人なのか、地球人そっくりの火星人なのか。会話が中心の作品で、その会話がすごく面白いSmiling face with smiling eyes行ったり来たりの心理戦。

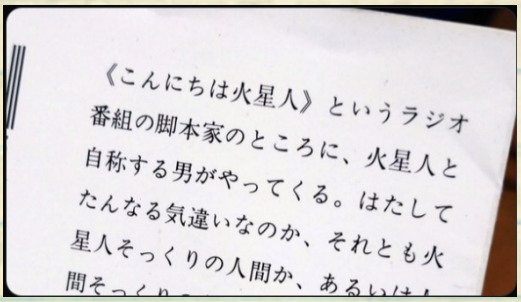
自分で自分の存在を証明するって難しいですね。

漂識ゆきc_ง'ω'@HydroYourSeason·Jun 4

Replying to @DJ_CHICHIKAYU

あらすじ

私、安部公房オタクなので、持ってる範囲で貸せるものがあればいつでもお貸しするよ



今月の石川淳

信天翁@ahoudorisan·Jun 7

世田谷文学館の石川淳さんの展示が良かったので、地下に潜って『狂風記』の特装本出してきた。限定とあるけど550部なので有り難みには欠ける。番号が423だから死になさいみたいな。でも皮装、石川淳先生サイン入り。印刻は安部公房さん。ここはいい。

もぐら通信

信天翁@ahoudorisan·Jun 5
世田谷文学館一階は石川淳展。生原稿の文字は立派、さすがである。
文学者たちからの手紙は、安部公房、加藤周一、福永武彦、三島由紀夫、澁澤龍彦、丸谷才一さんなど、誰もが石川淳さんを心から敬愛していることが、文章から伝わってくる。それだけでもどれだけ優れた作家であったかよくわかる。

今月の円城塔

小島秀夫@Kojima_Hideo·Jun 4
円城塔さんが脚本、シリーズ構成の「ゴジラS.P」。配信日にネトフリ付けたら、PVでラドン登場。デザインがほぼ翼竜でこれは怪獣じゃない？ので一旦観るのをやめた。でも、やっぱり観ようと観始めたら止まらず、昨晩11話まで一気観！なんや、おもろいやん！ハマるやんか！続きがはよ観たい！残り2話や！

今月の愛読者

ヤニパン@yani_pants·Jun 6
安部公房そんなに難解でもないし絶対ひとすけさん好きだと思いますよSmiling face
百閒先生は件とかサラサーテの盤とか好きですねSmiling faceSmiling faceSmiling face
漱石は無難に吾輩は猫であるとか夢十夜とか好きなんですけど随筆も面白かったですThumbs up

もぐら通信

今月の他人の顔

鱗翅類学者@butterfly_guyy·Jun 6
他人の顔　@ シネマヴェーラ渋谷
初鑑賞。フィルムでの上映。前衛的な「ダークマン」的な話。予想通りモダンな感じ。特に病院やシーンのセットの造形が超イイ！ここが映像的には一番カッコ良かった。ビアホールのシーンで、安部公房がちょびっと映ってた。

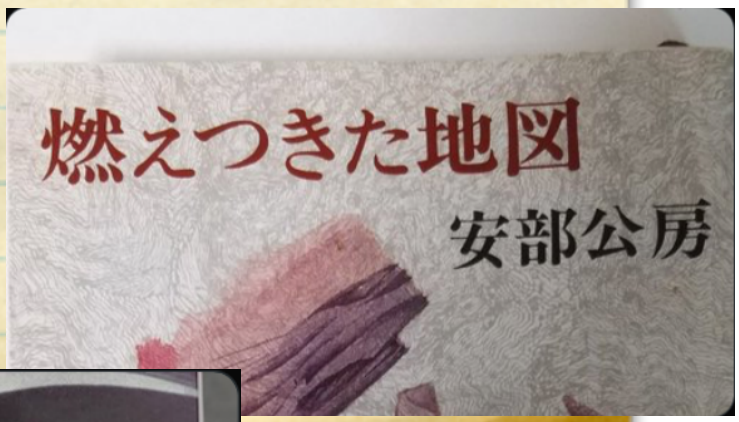
Tatsuhisa@tatsuhisa33·Jun 6
勅使河原宏『他人の顔』
安部公房原作。事故で顔に大火傷を負った男が、妻や同僚から疎まれたため、精巧な皮膚の仮面を作ってもらい、人間を取り戻そうと、妻を誘惑しようとするが……。顔のもつ意味、自己同一性、なりすまし、など現代に通じる鋭い問いかけある心理ドラマ、寓話。傑作Sparkles

今月の周辺飛行

音隅 管譜@otonezumi·Jun 1
「秩序＝騒がない世間」という発想は、それ自体、創造行為の圧殺なのである　『周辺思考』安部公房

今月の燃えつきた地図

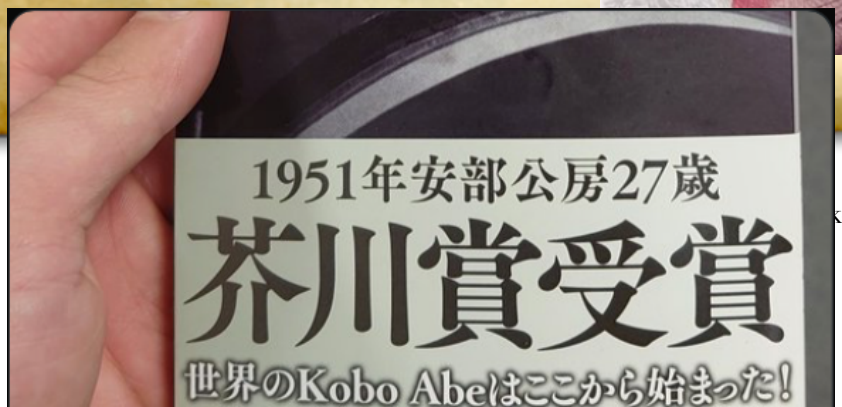
フィールドトップ氏@fieldtopcond·Jun 2
勅使河原宏Dommuneをyoutubeで見る。勅使河原宏を知ったのは武満徹からの影響なのだが、中でも前衛的で好きなのは「燃えつきた地図」。映像が出版されていないのでこんな作品があると知った当時は原作を読み安部公房にもハマる。今度上映されるようなのでスクリーンで見てみたい。#dommune



今月の壁

シロロン@shiryosuke251·Jun 4
安部公房の壁を読みながら
大量のほうれん草のおひたし

シロロン@shiryosuke251·Jun 4
同じ歳の時に、安部公房は何を見たのか



ke2003@yahoo.co.jp

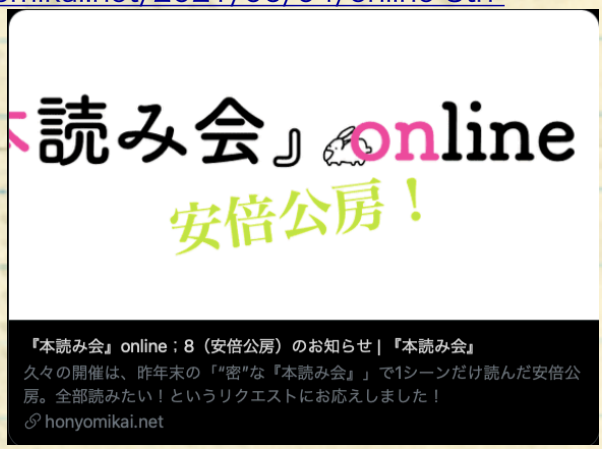
もぐら通信

今月の読書会

『本読み会』@honyomikai·Jun 5

3月の「谷賢一さんと読む！『福島三部作』から、早くも3ヶ月が経ってしまいました。久々の『本読み会』は、昨年末に1シーンだけ読んだ、安部公房『友達』。全シーン読みたいというリクエストにお応えしました！

ご参加お待ちしております！https://honyomikai.net/2021/06/04/online-8th-information/



今月の井上夢人

井上夢人@InoueYumehito·Jun 7

#人生を支えたミステリー ミステリー

と呼んでいいのかジャンル音痴の僕には

判断がつきませんが、学生時代に心酔し、

小説とはすごい力を持っているものだ、

と影響を受けたのは安部公房の諸作です。

無理矢理一作に絞るなら『燃え尽きた地図』でしょうか。『砂の女』と表裏を形造る絶品ですよね。

先輩のハト.@senpai_hato__·Jun 7

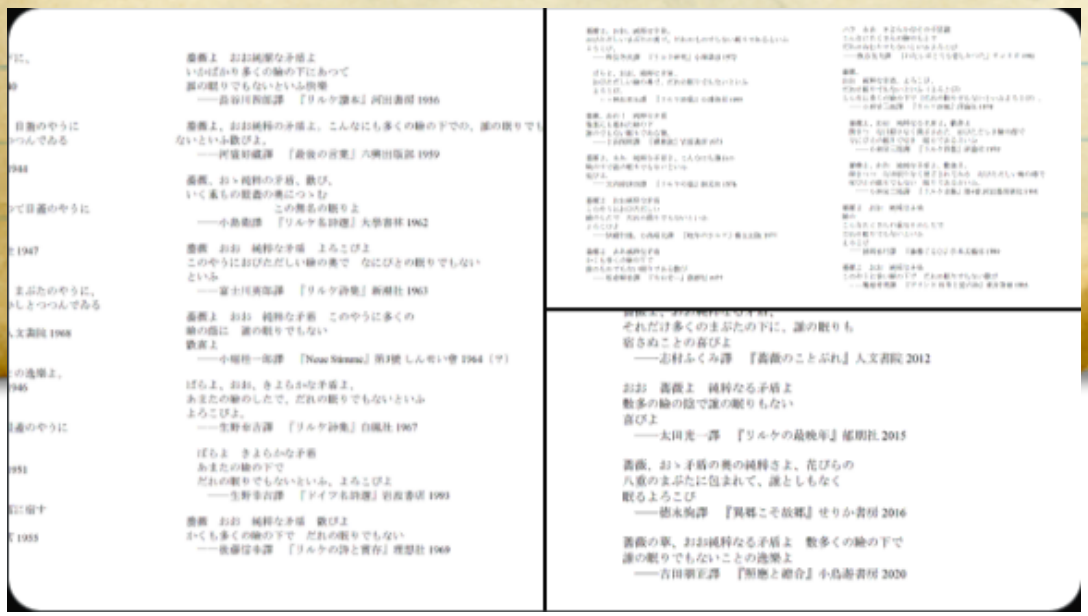
そういえば「クラインの壺」の導入部は安部公房さんの「砂の女」へのオマージュにもなってますね

今月のリルケ

嵯峨谷伯美@b6JpCVxcTtbt4pW·Jun 3

進捗は芳しくないが、今まで蒐集したライナー・マリア・リルケ「墓碑銘」の邦譯を纏めてみた。薔薇の顯現を齎す言葉。夥しい花襞は虛空に觸れては離れ、離れては觸れ。噎せるやうな芳香の只中で、詩人は眠りながら覺めるだらう。

　幾重もの瞼を順にひらきゆき薔薇が一個の眼となることを　——川野芽生



もぐら通信

今月の養老孟司

養老まにあっくす@yoromaniax·Jun 4

布施英利さんの『養老孟司入門』に「先生が研究室で執筆しているのを一度も見たことがない。一度だけ、安部公房の追悼文を頼まれたとき、二時間したら戻ってくると言って出かけた」と書いてあった。養老先生は本居宣長の鈴屋のように、大学の仕事と執筆を分けていたのかな。

竜生九子博物館館長@kyouinoheya·Jun 5

私は何だかよくわからないけど小難しい感じのおもしろさがあるこういうのを見たいんだけど、今だと誰と誰のがいいのかな。

https://www.youtube.com/watch?v=NOAiCyOCX1Q&t=1s

今月のヘーゲル

toshi@toshi_unko·Jun 6

安部公房ってヘーゲルの影響受けてるんかな。なんか作品の構造が弁証法の運動っぽい

［編集子］

ヘーゲルの影響は全く受けてゐません。反対に全否定でした。成城高校時代の哲学の親しき友、中埜肇（はじむ）は京都帝大の哲学科に行つて有名なヘーゲル研究者になりました。安部公房はいつも主張の正反対の人を大切にしました。中埜肇は後年、ヘーゲルが馬鹿にしたショーペンハウアーの日本の学術的な協会の理事を務めました。ショーペンハウアーはその主著の中でヘーゲルを詐欺師と呼んで徹底的な批判をしてゐます。中埜肇もまた安部公房同様大きな振幅を許容する哲学徒であつたのです。中埜肇は後年時間論と空間論を著してゐます（講談社新書）。ショーペンハウアーの系譜には、よく名前の引き合いに出されるハイデッガーが位置してゐます。その他俗称（あくまでも俗称です）「ポスト・モダン」の哲学者たちは皆、何語で書いてゐても、その程度が甘からうと辛からうと、軽からうと重からうとみ

もぐら通信

な、馬鹿であらうと利口であらうと皆、男であらうと女であらうと皆、余計な人間どもが何をいはうが皆、カントーショーペンハウアーニーチェーハイデッガーといふドイツ哲学の超越論（通称「生命の哲学」）の系譜に属します。

今月の友田義行

YasuhikoIda@CytI1223·Jun 1
戦後前衛映画と文学: 安部公房×勅使河原宏 I
友田　義行 I本 I 通販 I Amazon
#DOMMUNE

今月の田中邦衛

Patrick@sabasky·18h
安部公房の『人間そっくり』が田中邦衛主演でテレビドラマ化されていたとは知らなかった。ぜひ観たい。

今月の密会

社会学・哲学・文学等私的名言bot@siteki_meigen·Jun 3
「たとえば性交渉開始の予告に、結婚式という名前をつけたり、交接に専念するための一時的離脱を新婚旅行と呼んだりする、社会的な嘘があるでしょう。とたんに猥褻感が消えてしまうわよね。儀式化された性行為には、人間関係中枢も安心して通行証を発行しちゃうのよ。」　ー安部公房『密会』

社会学・哲学・文学等私的名言bot@siteki_meigen·Jun 8
「手淫してみせてくれない。」「なんだって。」「言語心理研究所で出している<相性テスト>に書いてあるんだけど、相手が手淫する場面を想像しても嫌悪感を感じない場合は、心身ともに理想的な結合が期待されるんだってさ。」「冗談じゃない。」　ー安部公房『密会』

今月のカール・マルクス

tekuteku@tekuteku_sampo·Jun 5
マルクス 資本論(の解説)読んでいて、安部公房の小説『壁』と似てるなって思った。壁読んだの昔過ぎて雰囲気しか覚えてないけど…。資本論にはテーブルが踊る記述まである。ググってみたら、Sカルマ氏はマルクスの逆読みだって言ってる人がいた。
『カール・マルクス』なので頭から取ってるかもしれない
『対話で読む資本論5　テーブルが踊る？！マルクスの宇宙人ビュー（前編）』：

もぐら通信

https://ameblo.jp/erickqchan/entry-12650791320.html

今月の詩人の生涯

مهندسエンジニア@MomoNashiLychee·Jun 1

「詩人の生涯」は高校のテストで読んで以来なんとなく忘れられない、自分の読んだ唯一の安部公房。読んだのもその一回こっきりだが。

今月のメタフィクション作家年齢比較

ふりかけ@えーがとぎたーとまんがあかうん@0B6Azfejp18CDyD·Jun 2

三島由紀夫と安部公房、大体同じ歳。

大江健三郎と筒井康隆、大体同じ歳。

今月の満洲帝国

須和多"ルマ（勝運不倒翁）@suvadharma·Jun 4

こういう人たちが、人によっては＜赤い繭＞になり、また人によっては内地の日本人の一人に同化して、そしらぬ顔で植民地の人間を忘れて行ったんだよな。

それがウソや欺瞞や陰謀論に塗れていたとしても、それが現地の・安部公房のリアル。https://www.youtube.com/watch?v=sjBZOKw0vl4

キーン誠己氏のエッセイ（『波』６月号掲載）とドナルド・キーンさんの新刊『日本を寿ぐ九つの講演』：単行本未収録の講演集：https://www.shinchosha.co.jp/book/603865/

フェア新刊 エッセイ

感動を語り伝えること　キーン誠己

ドナルド・キーン『日本を寿ぐ九つの講演』

ドナルド・キーン記念財団代表理事

父がニューヨークの住居を引き払い、完全に東京住まいになった二〇一一年九月以降、私はすべての父の講演に同行した。押し寄せるように講演依頼があり、断ることが受けることより大変だった。二〇一三年には、講演した数が二十四回に及んだが、たぶんこれが最高だろう。九十二歳にしてものにした講演数だ。

生涯どれほどの講演をしたことだろう。実は今調査中だ。興味深い事実が次々見えてくる。

初めての講演はケンブリッジ大学で、一九五二年春、二十九歳だった。五回連続で「日本の文学」について講じたが、毎回十人ほどの聴衆しかなく、日本文学からの転向を真剣に考える程だと落胆した。日本語での初めての講演は、京都大学留学のため来日してから四か月後の一九五三年（昭和二十八年）十二月十四日、京都の同志社大学で「比較文学について」だった。

生来の話好き、話のうまさ、構成力、ユーモアは回数を重ねる度に磨かれていっただろう。大学の講義においても、父の話がいかに魅力に満ちていたか、教え子たちから今もよく聞かされる。

講演の聞き手は、父が話し始める前からどんな話が聞けるのか、いつでもどこでも興津々の様子だった。そして父が話すほどに聞き手はひきこまれていく。ユーモアのタイミングが絶妙で、エピソードは意外性に富んで面白い。父自身、「若いころはお金が欲しくて、講演をしました」と言っていたが、いつの間にか大学の授業と同じように好きになって、頼まれれば喜んで受けるようになったのだろう。そうでなければこれだけの回数はやれないだろう。講演はいつも疲れそうだった。講演後のサイン会も、「聞いてくださったお客様と直接会って一言でも話すことが僕は好きです」とよく言っていた。日本文学や日本文化の伝道師を体現することが貴任でもあり、最大の楽しみだったと思う。

最近父の遺した生原稿を調べていると、これは明らかに講演の草稿と思われるものが相当量見つかった。いつのものか分かるものもあるが、ほとんどが不明だ。簡単なメモ程度から、かなり詳しく記述してあるものまで、罫線のない用紙（時には便箋の裏）などに横書きで、鉛筆か万年筆で書かれている。日本語にまじって英語のメモもある。小さい文字で、正確な本字で書かれた肉筆の草稿は、神聖なまでに純粋な情熱や繊細さで、それを見ているだけで父がなにかを語りかけてくるようだ。

ほんの最近偶然に発見したが、一九八八年九月に札幌で、「松浦武四郎を読んでみて」と題し講演する際に書いたに違いない草稿と、その参考文献『松浦武四郎紀行集』（上・中・下、冨山房、一九七五―七七）が今私の手元にある。草稿の筆跡を見ても、また参考文献の傍線や英語のメモを見ても、一回かぎりの講演のためにいかに精魂込めて臨んだかを見て取ることが出来る。

一九七四年十二月に金沢で「わが愛する鏡花」と題して講演した時の草稿はまだ見つかっていないが、その時に読み込んだことが明らかな『日本近代文学大系7　泉鏡花集』（角川書店、一九七〇）にも、講演で語られた作品には、新聞の切り抜きなどが付箋がわりに挟まれ、克明に読み込んだ形跡が残されている。

正確にいつの頃かは分からないが、晩年にはワープロで書いた原稿を読むことも少しずつ増えてきた。読むだけとは言っても、時々原稿から目を離して聞き手に話しかけたり、機知に富んだ軽妙洒脱な話で聴衆の心を捉えることに長けていた。

最晩年、滑舌が悪くなったことを自ら意識しはじめたとき、父は私を前にして原稿を読む練習をするようになった。「分かりにくいところ、おかしいところがあったら教えてください。直してください」と私に言った。その謙虚さと責任感に頭の下がる思いだった。それを講演の数日前から毎日、時には二度も三度も私を前にして練習した。それだけでも、やっぱり父は並の人ではないと思った。

私も専門分野である古浄瑠璃について三十分ほどが講演することがあった。「お父さん、講演をするときに大事なこと、気をつけることはなんでしょう」と質問した。「それは自分自身が感動したこと、美しいと感じたこと、面白いと思ったことを、その時の気持ちをそのままに情熱をもって相手に伝えることです。美しいと感じたこと、面白いと思ったことを、その時の気持ちをそのままに情熱をもって相手に伝えることです。そしてもうひとつ大切なことは、ユーモアがあることです」という答えだった。これも父の大切な遺言のひとつになった。

ドナルド・キーン『日本を寿ぐ　九つの講演』（きーん・せいき）2021年6月発売中

波　2021年6月号

もぐら通信

尋ね人

Joさん、takranke2003@yahoo.co.jp宛もぐら通信にご連絡下さい。

改訂版の発行：

第１３１号（第五版）をダウンロード下さい。

URLは：https://docdro.id/4ar4XBO

訂正箇所は次の通り：

１７ページ：周辺飛行（４２）：周辺飛行３~~９~~ 公然の秘密

訂正前：エピグラム

訂正後：エピグラフ

３７ページ：縄文紀元論：H 古代の天皇の寿命の長さは何を意味するのか

訂正前：「歴代天皇・すめらみこと寿命表」の２６代継体天皇と２７代安閑天皇の間に作表上のズレがあつた

訂正後：このズレを修正した。

５５ページ：

改訂前：いつも間にか秋になり冬になる

改訂後：いつの間にか（これが超越論）秋になり冬になる

５９ページ：後者と前者を入れかへた：

訂正前：後者については自づと浮世絵のことで、前者については座標をズラす位相の（賀茂真淵の）間色の三次元の座標の話で既述の通りです。

訂正後：前者については自づと浮世絵のことで、後者については座標をズラす位相の（賀茂真淵の）間色の三次元の座標の話で既述の通りです。

そのほかの小さな誤変換などの二、三の誤植を訂正した。

ダウンロードのURLは：https://docdro.id/4ar4XBO

巻頭詩

（１７）

『ボルヘス詩集』

ボルヘス
鼓直訳

若やいだ夜

夜の浄めの水は、すでに多くの色と
多くの形をわたしから祓ってくれた
すでに庭園では、鳥や星たちが眠りと影という
昔ながらの決まりの待ち焦がれていた
復活をことほいでいる。すでに影は
物の見せかけの姿を映す鏡に封印をした。
ゲーテのあの名言。近いものが遠のく。
この短い言葉に薄暮の一切が込められている。
庭園では、薔薇たちが薔薇であることをやめ、
〈薔薇〉となることを望んでいる。

周辺飛行
（４２）
３。『周辺飛行』について（２１）
周辺飛行４０―蓄音機

岩田英哉

蓄音機とは、要するに音を出す箱男である。

ネットで調べると、文字通りの鞄型の蓄音でもある。

この写真を見れば、蓄音機といふ名前が箱男や鞄であれば、これはそのまま安部公房の「公然の秘密」の世界であるといふ此の公房用語を使つて、この周辺飛行も一言で要約してよいでせう。

何が公然の秘密かといふと、小学生時代の安部公房に「催眠的な支配力」を持つてゐる「四、五歳年長」の従兄との、いはば悪童二人による安部公房の祖父への度を過ぎた死の床に伏してゐる老人の生死に関はる悪戯が、誰にも咎め立てされなかつたといふことが公然の秘密だといふことになります。ですから、もはや最初の出だしから、これは安部公房一流の夢なのか現実なのか判然としない世界なのであり、冒頭に書かれた短い章と終はりに置かれた短い類似の文章が、初めと終はりのメビウスの環を構成してゐる以上、この夢は少しづつズラされて、即ち変形されて永遠に夢見られる現実なのであり、それを、これら散文のあとに締め括りとして、安部公房が自作の詩を置いてゐることは、この蓄音機といふ箱男を巡る話が、安部公房の詩の世界の話であること、そして、この詩の世界がどのやうに描かれてゐるのか、そのことの次第を表してゐます。次のやうな詩です。箱男が書いた詩であると思つて読んで下さい：

総論で世界を論じ
各論で食欲を語る
インク壺の毒蛇たち
こぼれて地図になる

地図を指がさぐると
指が夢をみる
蓄音機という牢屋に閉じ込められた
夢を見る

どんな明日でもかまわない
とにかく今日と違った
明日のために

「各論で食欲を語る/インク壺の毒蛇たち」とありますので、この毒蛇たちは餓えてゐる。いつでも人に噛み付いて毒で人を殺し得る蛇である。「インク壺の毒蛇たち」とありますので、解釈は、

（1）インク壺が毒蛇の隠喩（メタファ）であつて、この壺が幾つもある。
（2）一つのインク壺の中に複数の毒蛇が何匹もゐる。
（3）複数のインク壺の中に複数の毒蛇が何匹もゐる。

この三つの場合のいづれかであり、これらの場合全てを、安部公房は「インク壺の毒蛇たち」といふ「こぼれて地図にな」つたインクで書いてゐる、といふよりは「こぼれる」のですから、自然に書かれてゐるわけです。自動筆記だといつても良い。そして、この詩もそれまでの散文も皆、この毒蛇の所業である地図なのであり、読者たるあなたは既にその毒におかされてゐて此の詩を読んだ時には既に時遅し。といふことを、この詩に至つて知るのです。これが、安部公房の仕掛けた仕掛けです。

冒頭の蓄音機の話から、あなたは毒蛇の毒におかされて地図の上を彷徨ふ箱男となつてゐる。しかも、あなたに自由意志といふものがあるとすれば、それは、あなたがこの「地図を指でさぐる」ことをしたときなのであり、此処であなたの指が夢を見るのです。その夢は「蓄音機という牢屋に閉じ込められた/夢を見る」といふ夢を見るのです。この蓄音機の響かせる音は、いはば『箱男』の中の一章《それから何度かぼくは居眠りをした》に登場する貝殻草の効果と同じ効果を有してゐるといふわけです。さうして、最後の連は、安部公房の明日ですから、絶望の明日には違ひなく、たとへさうであつても、

どんな明日でもかまわない
とにかく今日と違った
明日のために

と夢見る明日であるといふのは、一寸いつもの散文での安部公房の明日と違つて、何か希望のあるやうな気が明日にしないわけではない気配を私は感じますが、あなたは如何。

最初の散文の段落の一行目は「蓄音機になった夢をみた。」であり、最後の散文の段落の一行目は「つい昨夜、蓄音機になった夢をみた。」であるので、実話か虚構かわからぬ老人殺し、といふ言葉が言ひ過ぎならば、老人半殺しの悪童たちの過ぎた悪戯は、この最初の現実の一行と最後の夜見た夢の一行の間に展開し、話者は蓄音機であつて、この蓄音機によつて語られるお話であるといふことになります。

安部公房のこの仕掛けは、この通りに用意周到、そして仕上げの吾郎次郎は既述の通り。これがこのまま普段の安部公房の小説作劇法だといつてよいと私は思ひますが、あなたにおかれては如何か。

この一夜の夢である話者の祖父は、学童たちの悪戯に触発されて、嫌いなレコードをかけられて発する音の原因である蓄音機に何度も繰り返して床を這い出し、これは私のいひ方ですが人間尺取り虫となつて這つて行き、蓄音機の音を止めることを瀕死の姿ですることを繰り返す。これは、夢の中で祖父である老人は蓄音機の外部にゐて、二人の悪童の悪さを受けるわけですが、安部公房の短編に『家』といふ短編があつて（１９５８年）、この作品では老人は箱か鞄と同じ姿で「まるで空っぽのトランクのような軽さ」の祖先として描かれてゐる家族の公然の秘密となつてゐます。ここには『闖入者』と戯曲『友達』の世界も描かれてゐます。公然の秘密として「いつの間にか」（超越論）家の中にゐる闖入者。といへば、あなたには伝はる筈です。

「周辺飛行４０」の祖父の死んだのは、悪童どもが繰り返し祖父の嫌いなレコードをかける遊びには、祖父が蓄音機に辿り着くのに時間が段々とかかりすぎるほどに衰弱してしまったので、辿り着くまで待つのに飽きてしまひ、「待ちくたびれたぼくらは、別の遊びのために、場所を変えた。祖父が死んだのは、それから間もなくのことだったと思う。/咎められた記憶は、やはりない。」

さて、詩人は「総論で世界を論じ/各論で食欲を語る」のだとして、蓄音機にとつては悪夢のやうな悪戯を、「各論で食欲を語る」のが悪餓鬼どもの無邪気な悪意といふ時間を貪る飢餓、即ち食欲であるとして、それでは総論で世界を論じ」る詩人とは一体何を論じるのであらうか。

それは、ここまで周辺飛行して来れば、さまざまな云ひ方がありませうが、やはり公然の秘密を論じるのだといふのが一番ピッタリと来るやうに思ふ。悪餓鬼どもの無邪気な悪意といふ時間を貪る飢餓とは、前回の周辺飛行で橋の上から仔象にマッチ箱やライターを餌として放り投げる世間といふ見物人である。いや、それとも、悪意があるとはいへ、無邪気であるが故に、この子供たちは、古新聞のやうにメラメラと燃え上がるほどに餓えてゐる仔象たちなのであらうか。

さういへば、蓄音機の音はレコードの溝といふ凹の、仔象ならばあの泥で埋まつた掘割から、響いて来るのである。

やはり、冒頭の「蓄音機になつた夢をみた」のは悪童の一人である話者なのであり、確かに話者は箱男なのであり、内部で何かを話して意味不明な鞄なのである。そして、ここまで原文を読んで来たあなたは、あなたこそが蓄音機となつてしまつてゐることに気づくことでせう。それは、S・カルマ氏が壁に「いつの間にか」壁になつて垂直方向に成長し続けてゐるといふことになつてしまつてゐるのと同じことです。

これを時間の空間化と安部公房はいふのですが、これをいつてしまふと実も蓋もなく、全てが終はつてしまひ、何も始まらなくなりますので、ここで終はりに致します。

もぐら通信

二十一世紀の日本文学のためのスケッチ・ブック

Part I

塔の文学

（１３）

岩田英哉

目次

Part I 塔の文学
１。森鴎外の塔と夏目漱石の塔
２。江藤淳の塔と三島由紀夫の塔
３。三島由紀夫の塔と安部公房の塔
４。安部公房の塔と埴谷雄高の塔
５。小林秀雄の塔と安部公房の塔
６。安部公房の塔と大江健三郎の塔
７。 SF文学史を伝統的な日本文学史に上位接続（conjuntion）する
７.２ 一体二つの文学史はいつ何処で上位接続して一体となつたのか
７.２.１ 何故川端康成は安部公房の『壁』を芥川賞に推したのか
７.２.２「安部公房の読者にしか書けない『美しい星』論」から引用して、二つの文学史の同時代性の重なりの文学的な潮流を吟味する
７.３　ヨーロッパの近代小説とは一体何であつたのか？
７.４ そもそも日本文学に云ふ小説とは何か
８。安部公房の塔と倉橋由美子の塔
９。夏目漱石の塔（F＋f）と安部公房の塔¬(F x f)

Part II　『文章読本』論
Part III　実践篇：小説『S・カルマ氏の逆襲』（英訳版・原題『The Fight Back of S. Karma』）：S・カルマ著［翻訳］岩田英哉

＊＊＊

８。安部公房の塔と倉橋由美子の塔（２）

安部公房の「概念の塔」を私たちは知つてゐるが、さて、倉橋由美子の塔は一体どこにあり、それは何と呼ばれてゐゐるものか。

問：さて、倉橋由美子の塔は一体どこにあり、それは何と呼ばれてゐるものか。
答：その塔は夏の積乱雲の塔であつては文字通りに「雲の塔」と呼ばれて、土佐は高知の故郷での夏の海で青春への惜別と、その後東京といふ大都会に遊学して以降の人生との境目に立つ、これは雲の塔である。雲の塔である限り、この塔は、この論考の最初に掲げたワシントン・アーヴィングのエピグラフ「Castle of Indolence（無為の城）」に通じてゐるでせう。それは地上に立つ塔ではなく、雲の上に立つ塔だからです。そこには、『夢の浮橋』も架かり、『城の中の城』も立ち、『夢の通ひ路』も通つてゐる。

まづ、倉橋由美子のエッセイ「雲の塔」の話から始めたい。そして、文学地図としての座標を示し、最後にこの作家の『反小説論』を論じて、これをそのまま明治「以前」からの日本文学の伝統文学の線上にあつて、さういふ意味では日本の明治以来の近代文学しか視野にない批評家の批評の対象にはならぬ作家であり、従ひ評価が難しい。しかし、それ故にこそ、これからも二十一世紀に日本文学にとつて重要な作家の一人であり続ける小説家として、この論考の文脈に於いて示した日本文学の見取り図の中で論じたい。

倉橋由美子の文学は、安部公房の文学と共通する要素を幾つも含んでゐます。後者がSF作家と呼ばれることが往々にしてあるのに対して、倉橋由美子がさう呼ばれないことが不審である。これは、安部公房がSFといふ冠辞で、それまでの既存の文学観から遠ざけられてゐたやうに、倉橋由美子もまた同様に冠辞はことさらにないものの、それだけ理解されて正面から批評されることの少ない作家だつたのではないだらうか。処女作にその作家の全てが胚胎してゐるといふ文学的格言に従つて『パルタイ』を最後の章で論じたい。

１。倉橋由美子の「雲の塔」

倉橋由美子は故郷土佐の高知を離れる前の最後の夏休みを『雲の塔ー七月の思い出ー」の冒頭で次のやうに書いてゐます（講談社『迷路の旅人』所収。１２３ページ）：

「梅雨が明けて夏休みも始まると、これが私にとっては本当の夏の始まりである。（略）私たちはみんな水と魚を相手にすることに夢中で、恋人同士もおたがいに恋人であることを忘れていた。あのとき、水のなかで私の唇にふれたのは恋人の唇だったのか、冷たい魚だったのか、いまはそれもさだかでないような気持ちになる。気がつくと私たちの頭のうえで雲の塔が崩れかけており、遠い山のむこうで雷が鳴って、それが私に七月の終りを告げ、なぜか突然、恋の終りの近いことを感じさせた。そしてそれはやがてその通りになった。

（暮らし４４・６・２５）」

この塔の位置は、同じ四国の、とはいへ別の国（愛媛）から上京した大江健三郎の、この（田舎→首都）へといふ移動の視点からは、後者の小説の文学地図と同じ座標に置くことができます。二人は同じ歳の生まれで、同じ四国の、終戦時には倉橋由美子も疎開先の山奥で、ラジオの前に整列して終戦の詔を聴いた経験を共有し、そして同じやうに上京後に学生作家として世に出たといふ経験を共有してゐます。しかし、倉橋由美子には、大江健三郎とは正反対に小説家としては美事に異質であつて、倉橋由美子の文学は安部公房と同じ象限にあつて、従ひ私小説を書く大江健三郎の意志とは全く無縁です。それでも、大江の座標にある語彙の幾つかを取

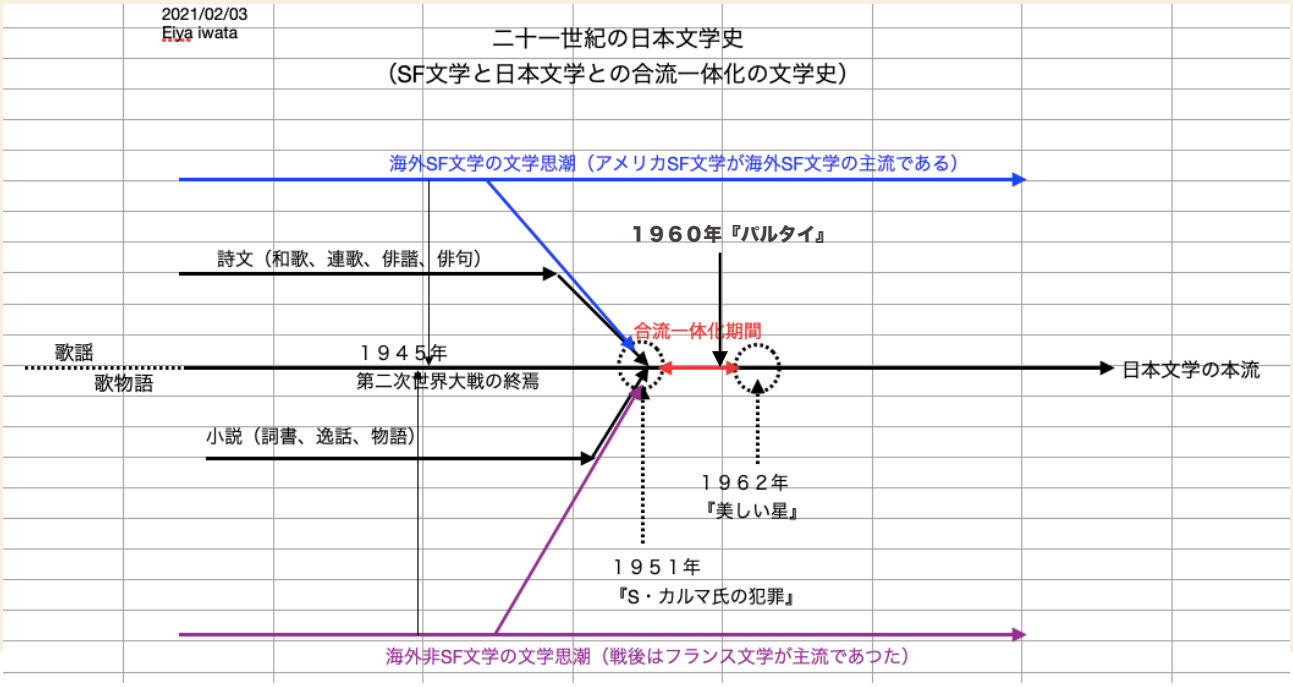
り去つて、同じ座標の上に倉橋由美子の語彙で座標を構成して此の作家を置くとどうなるか、その塔がどこに立つてゐるのか、従ひ其の塔はどのやうな塔なのか、その文学はどのやうな文学であるのかを、「３。倉橋由美子の文学地図」の章で倉橋由美子の文学地図を描いて、その姿をみることができます。

この倉橋由美子の座標は、雲の塔を概念の塔に置き換へれば、安部公房の座標と同じだと考へて良いものです。異なるところは、小松左京の云ふ虚数iの世界である下半分の地下世界の領域が、倉橋由美子にとつては政治ではなく日本の古典であること、対して安部公房の場合には、これが「問題下降」［註１］の領域であつて、この古典が外国の古典であるといふところです。また、安部公房は政治活動に日本共産党員として深く関はりましたが、倉橋由美子は処女作『パルタイ』の示す通り、そして其の題名を裏切つて、最初から政治とは無縁の作家です。その小説観については「４。倉橋由美子の小説観：『反小説論』」にて後述します。

［註１］
「問題下降」とは何かについては『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号から第５９号）にて詳述しました。

２。倉橋由美子の文学的位置

この位置は、私の「二十一世紀の日本文学史」によれば、『パルタイ』が丁度１９６０年の明治大学学長賞受賞と芥川賞候補に名前が挙がるといふ年ですので、安部公房の『S・カルマ氏の犯罪』（１９５１年）と三島由紀夫の『美しい星』（１９６２年）の間の文学的な登場といふことで、まさしく日本の古代からの詩文藝と詩魂を含む小説の「合流一体化期間」に世に出た作家です。これが倉橋由美子といふ作家の位置です。倉橋由美子は自分の小説が詩を含んでゐることと批評を含んでゐることを明瞭に意識してゐます。「二十一世紀の日本文学史」を再掲します。



単行本『わたしのなかのかれへ　全エッセイ集』（講談社。昭和四十五年三月十二日。）の中の「わたしの小説作法」（１９４ページ上段）に次の言葉がある。その前段から述べてきたことの要約であり結論が、これです：

「とりわけ「小説」のことばは他人に情報を伝達するための手段にすぎないという仮定を追放すること。そこでわたしの小説は詩と双生の兄妹に似た関係をもつことになり、古い「小説」を求める読者を拒否してしまうでしょう。」

この言葉は１９６５年の言葉ですから、作家が登場してから５年目の言葉です。そして、学生作家として登場した時の『パルタイ』を巡る肯定否定論争の論点は、大岡昇平の「『パルタイ』の評価について――作家と批評家の争い――」に簡潔に書かれてゐる（大岡昇平全集（筑摩書房）第１５巻・評論II、１７ページから１９ページ）。否定は、まづ小説家丹羽文雄によつてなされ、その否定の根拠は「小説家を感動させる小説」ではないといふ点にあります。しかし、追々述べて行きますやうに、倉橋由美子は安部公房同様の虚構作家でありますから、文壇の小説専門制作者相手に小説を書いてゐるわけではないのですから、これは当然の否定的評価といふべきです。他方、この小説を褒めたのは、この大岡のエッセイによれば、処女作を推挽して倉橋由美子を世に押し出した平野謙に加へて、中村光夫、山本健吉といふ優れた批評家たちでした。このことが、当初から倉橋由美子の小説のあり方と其の文学上の、また文学史上の位置を示してゐます。確かに、この作家の小説はどれも辛辣な批評的な洞察に満ちてゐる散文自覚的な散文です。この自覚の理論的な説明は『反小説論』に詳しい。「４。倉橋由美子の小説観：『反小説論』」で後述します。即ち、

倉橋由美子は同時代を共有する安部公房、三島由紀夫、大江健三郎とともに、小説に詩魂と批評精神を導入して虚構の世界を創造する仕事をした作家である。

といふことになります。

さうして、私たちは何故この時期に、特に大江・倉橋（共に１９３５年生）登場後に、それ以前の安部・三島といふ一年違ひで大正１３年・昭和初年（１９２６年）生といふ先人二人と同じ文学的主題を小説家として抱懐してゐたかといふことは、後生から見れば理由のあることではないかと思はれる。この時代は昭和の高度経済成長の時代でした。やはり、此処でも私が批判したいのは、批評家・研究者の怠惰であり怠慢であつて、高度経済成長なる呼称は経済官僚の命名になるもので、文学の人間が独自に文学の観点から名前を命名することができてゐないといふことが問題なのです。文学も高度経済成長したのか？［註２］

［註２］
YESといふ以外にはどうもなささうである。何故なら、それが原因で日本文学は廃れたといふ私の仮説は別途『何故日本文学は衰退したのか？』（もぐら通信第７９号、第８１号及び第８２号）で論じましたのでご覧下さい。小説家は貧乏でなければいい作品が書けないのであらうか？とすれば、誠に情けない話である。現下の小説家たちよ、メルセデスもBMWも同時に持つて大いに乗り廻して傑作をたくさん書いた安部公房を見習ひなさい。ダウンロードは次の通り：

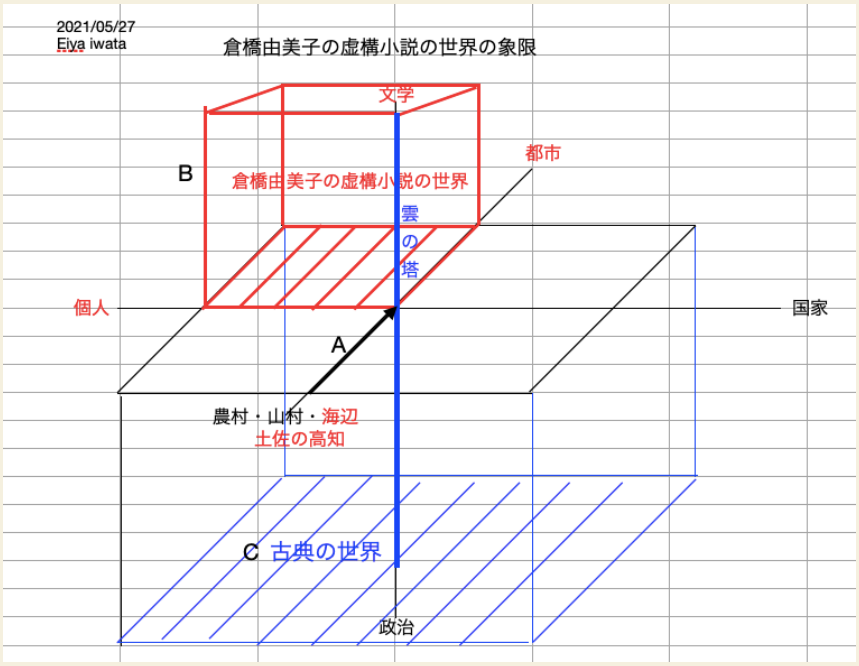
第７９号：『何故日本文学は衰退したのか？』：https://www.scribd.com/document/374148657/第７９号
第８１号：『何故日本文学は衰退したのか？２』：https://www.scribd.com/document/378468883/第８１号-第四版
第８２号：『何故日本文学は衰退したのか？３』：https://www.scribd.com/document/379680303/第８２号

さて、このやうな次第にて、この「合流一体化期間」に登場して以降、これら二人の先行作家と文学的人生をともにした作家が、倉橋由美子であるといふことが、この図解からいへます。同い年の作家として、これ以降の大江健三郎を加へても良いでせう。

大いに毀誉褒貶の議論の対象となつた『パルタイ』と其の文学については「５。『パルタイ』論」で後述します。登場した時に物議を醸すといふことは、大岡昇平のいふ通りに、倉橋由美子は既に此の時何者かなのです。

３。倉橋由美子の文学地図

さて、倉橋由美子の文学地図です。ダウンロードは：https://docdro.id/p2jAU2Y



この図のいふところは次のことです。

（１）倉橋由美子の小説は土佐の高知といふ海辺の町から東京といふ都市の方向Aへ、そして国家と個人の軸と交差点に当たって、
（２）時間の存在しない方向である垂直軸である「雲の塔」が立つた。
（３）その虚構の文学は雲の塔を主軸に（個人、都市、文学）の象限にあるが、
（４）同時に其の交差点から虚数iの世界へと、安部公房のもぐらの世界と同様に、下降して古典の世界Cへと根を降ろして、或る時期から、ゐる。
（５）この古典Cの平面は、安部公房なら虚数iとしての、即ち陰画として黒いすりガラスを通して見える政治を論じ、個人と国家の関係を論ずる地下世界の平面であるのに対して、倉橋由美子の平面Cは日本の古典と伝統美の世界です。この上半分の意はば実数・real numberの世界から虚数・imaginary numberの世界へと下降する最初の作品が『夢の浮橋』（１９７１年）です。三島由紀夫の死は何につけても日本の現代史の一つの分岐点であるやうに此処でも此の規矩は当てはまり、相当自覚的に此の作家は『夢の浮橋』から正仮名遣ひで書き始めまてゐます。

この作家による三島由紀夫の昭和天皇に対する諫死といふべき死を私服刑事の来訪で初めて知つた日のことを（何しろ倉橋由美子は三島事件に関係のある作家だと官憲に考へられてゐた）『英雄の死』と題したエッセイで実に正確に此の天才の死を簡潔に無駄なく言ひ当ててゐます（講談社刊『迷路の旅人』所収、１７４ページ～１８２ページ）。天才といふ言葉もまた正しく使用してゐる。

私は此のエッセイを読んで、三島由紀夫の死を論ずる読者たち（研究者も含む）が、何故倉橋由美子の此のエッセイを引用して論ずることがないのか不審でなりません。それほど見事な書きつぷりで、女の癖に、世の男性三島論者の文章にある、三島由紀夫の死を前にして狼狽（うろた）へるといふ女々しさがない。これは何故かと考へるために、三島由紀夫の読者が倉橋由美子を読むことは意義のあることです。私は三島由紀夫の読者に、一読を強く勧めたい。

（７）『夢の浮橋』（１９７１年）から、通称桂子さんものと呼ばれる連作が『城の中の城』（１９８０年）『シュンポシオン』（１９８５年）『交歓』（１９８９年）と刊行されて行きます。これらは皆、古典的仮名遣ひで書かれる。その理由は、次のやうに作家自身によつて説明されてゐます：

「しかし文学の仕事をしている人間は、文学の伝統という大樹から樹液を吸って生きているので、どの枝のどの部分につながっているかはそれこそ枝葉末節のことに属します。場合によっては、地中の古い根から直接養分をとることもあります。現在の私は枝葉末節の部分には興味を失ってしまいましたので、今後もこの根のほうをほじくることが多くなるだろうと思っています。ということがじつは『夢の浮橋』

や『反悲劇』のようなものを書いたことの言訳でもありますが、私としてはこの二作で格別奇異な試みをしたつもりはありません。「伝統への回帰」などと大袈裟なレッテルを貼られてはかえって居心地が悪くなります。」（『迷路の旅人』所収「素人の立場」１９７ページ下段）

本人は、この後に続けて、自分は「反リアリズム」でもなく「観念の操作」などせず「抽象小説」を書いてゐるのではないと、これらの自分に貼られて迷惑してゐるレッテルを「伝統への回帰」と一緒に否定してゐます。
（８）倉橋由美子の小説観は、三島由紀夫の死の歳の前の、登場してから１９６９年までの間に確立してゐることが、『わたしのなかのかれへ』（１９７０年）および『迷路の旅人』（１９７２年）を読むと解ります。
（９）此処までを論じて来て、倉橋由美子が『密会』（１９７７年）の書評の言葉、即ち（１）突然の誘拐、（２）迷路である現実と夢、（３）時間の存在しないことを挙げたことが、実はそのまま倉橋由美子の小説の性格なのだと、凡そのところを考へることができるのではないかと、さう思つて下さつた上で、この作家の小説観を以下に眺めることにします。

「（２）迷路である現実と夢」といふ倉橋由美子の評言の中には、安部公房の多用するノート形式の通称メタ・フィクション（安部公房固有の話法「僕の中の「僕」」）、私の言葉でいへば再帰的な超越論、即ち更に超越論ですから「（３）時間の存在しないこと」が含まれてゐます。「（１）突然の誘拐」とは時間の因果関係の存在しない世界の始まりといふ点に於いて（私たちの古事記の世界です。カフカの『変身』の第一行を思ひ出して下さい）、倉橋由美子の世界に通つてゐるのです。この作家が日本の古典に範を求めることは当然の道でありました。そこで、古典を範にとれば超越論的な虚構小説になり、私的事実をもとにして書いた小説は超越論的小説にはならず、私小説と呼ばれる小説になるといふ理解は正しいでせうか？

問：私的事実をもとにして書いた超越論的私小説はないか？
答：この問を立てて考へてみても、やはり有り得ない。何故なら、藤枝静男の『空気頭』の冒頭に、私小説の大家滝井孝作の次の言葉があるからです：

「二〇代の終わりころ、滝井孝作氏を訪問すると二、三百枚の本郷松屋製の原稿用紙を私の前に置いて「これに小説を書いてみよ」と云はれたことがあった。そして「小説というものは、自分のことをありのままに、少しも歪めず書けばそれでよい。嘘なんか必要ない」と云われた。私は有難いと思ったが、もちろん書かなかった。そのころの私には、書くべき「自分」などどこにもなかったから、書きようがなかったのである。」

「7.4 そもそも日本文学に云ふ小説とは何か」に掲示した日本の小説の分類表によれば（勿論これは世界中に通用すると確信してゐますが）、この滝井孝作の私小説は、（経験談、因果律・時系列談）といふ話になり、これが更に、「詩文に添へたる散文」になるのか、それとも「詩文に添へざる散文」になるのかで、私小説は更に二つに別れることになります。

上の引用に続く次の段落で書いてゐるところによれば、藤枝静男のこの『空気頭』といふ小説以前の小説は（経験談、因果律・時系列談、「詩文に添へたる散文」）といふ私小説を書いてきたので、この小説では（経験談、因果律・時系列談、「詩文に添へざる散文」）といふ滝井孝作に教はつた通りの小説を書くと宣言してから、事実に即した話を『空気頭』と題して語り始めるのです。

しかし「小説というものは、自分のことをありのままに、少しも歪めず書けばそれでよい。嘘なんか必要ない」といふ滝井孝作が、安部公房の『S・カルマ氏の犯罪』を積極的に推して、この作品が芥川賞を受賞したわけですので、この安部公房の作品に滝井孝作は何か何処かに「自分のことをありのままに、少しも歪めず書けばそれでよい。嘘なんか必要ない」といふ小説観に触れるものを強く感じたと理解して良いのではないだらうか。芥川賞受賞の選評の滝井孝作の言葉は安部公房の文体・style・様式を評価したものでした。両極端は相通ず。この「詩文に添へざる散文」私小説作家は、安部公房のロール・パン氏の詩を含む「詩文に添へたる散文」を評価したといふことになります。滝井孝作は河東碧梧桐に師事した俳人であり折柴（せつさい）と号した。どうも、かうして考へて来ると、私小説と虚構小説は離れたものではなく、詩を介して通じ合つてゐるのではないでせうか。何故かといふと、藤枝静男が、「詩文に添へざる散文」私小説（滝井孝作流）と、この教へに違へて自分が書いてきた「詩文に添へたる散文」私小説の違ひを次のやうに解説してゐるからです：

「私は、ひとり考えで、私小説にはふたとおりあると思っている。そのひとつは、滝井氏が云われたとおり、自分の考えや生活を一分一厘も歪めることなく写して行って、それを手掛かりとして、自分にもよく解らなかった自己を他と識別するというやり方で、つまり本来から云えば完全な独言で、他人の同感を期待せぬものである。もうひとつの私小説というのは、材料としては自分の生活を用いるが、それに一応の決着をつけ、気持ちのうえでも区切りをつけたうえで、わかりいいように嘘を加えて組み立てて「こういう気持ちでもいいと思うが、どうだろうか」と人に同感を求めるために書くやり方である。つまり解決ずみだから、他人のことを書いているようなものである。訴えとか告白とか云えば多少聞こえはいいが、もともとの気持ちから云えば弁解のようなもので、本心は女々しいものである。」

「わかりいいように嘘を加えて組み立てて「こういう気持ちでもいいと思うが、どうだろうか」と人に同感を求めるために書く」といふところに詩情があれば、超越

論的小説に近づくが、しかし、なければ、「材料としては自分の生活を用いるが、それに一応の決着をつけ、気持ちのうえでも区切りをつけたうえで」あつても、やはり私小説に留まることになる。そして、それは仮に虚構が混じっても、過去のことなのであつて過去に留まるだけの小説であれば、やはり超越論的な虚構小説にはならない。二十一世紀に「合流一体化期間」の延長線上に私小説があるとしたら、それは「詩文に添へたる散文」私小説の場合だけで、それも虚構小説とは一線を画した過去を虚構化する私小説といふ地位を占めることで、あり得るといふことになります。この地位と、ただ事実を書いただけでは経験談にはなつても、novelといふ話にはならないといふ小説観の間で、私小説はこれからも、書かれるとしたら、書かれることになります。

藤枝静雄が過去を虚構化するといつてゐることは、文法学の視点からは、実は超越論への第一歩なのですが、もし此れに未来の時間の話が『第四間氷期』の予言機械（コンピュータ）のやうに現在に干渉して事実を喚起する話になれば、私小説もまたメタ・フィクションになる可能性を大いに有してゐることになります。これが私小説の持つ可能性（possiblity）です。日本語といふ言語の持つ時制に関する融通無碍性を考慮すれば、蓋然性（probability）と呼ぶことができるかも知れません。たとへば川端康成の『抒情歌』のやうな虚構化への、私小説に於ける実現といふ蓋然性のことです。（『抒情歌』：https://ja.wikipedia.org/wiki/抒情歌_(小説)）

もしこのやうな私小説があるとしたら（あることでせう）、作家は、男であつても、『抒情歌』にあるやうに巫女（みこ）でなければならないでせう。川端康成は巫女となつて叙情から小説を、安部公房は論理から「シャーマン安部公房の秘儀の式次第」を、様式化したやうに。即ち、様式・文体・style・スタイルを創造したやうに。

さて、以上に論じたやうな私小説も含め、自身の登場するまでの既存の小説を全て敵に廻して、倉橋由美子の書いた小説論が『反小説論』です。かくして、巫女である性の女の書いた反小説論が、事実だけを記述した私小説に縁のあるわけもなく、従ひ、虚構の極みでないわけがありません。

本人は自分が虚構の世界との関係で巫女であることを「巫女とヒーロー」と題して次のやうに述べてゐます。このエッセイ集の題名が『わたしのなかのかれへ』であること、そして此のメタ・フィクションの構造が、安部公房の「僕の中の「僕」」と同じ構造であること、そして女性である作家の深層の、話法の、非現実話法の中の一人称の中の一人称が「かれ」（彼）といふ男性の三人称であることにご留意下さい。これに対して安部公房の場合は、あくまでも男の「僕」です。それ故に、この女流作家の次の発言がある。「わたしのなかのかれ」の言葉を表すのにカタカナを正しく使ふところは全く安部公房の言語感覚と同じです。これはこのまま倉橋由

もぐら通信

美子の素顔と仮面の関係論になつてゐます。今作家と巫女に関係する一部を引きます。

巫女とは「わたしのなかのかれ」のことで、しかしこの「かれ」から見ると「わたし」（倉橋由美子）は「アナタ、ツマリアタシノナカノ彼女ニムカッテ書イテイルシ、アタシハコトバノ世界ニ仕エル巫女ナノヨ、父母未生以前、天地未分化ノアナタト交信ヲツカサドッテイル巫女ナノヨ。つまり巫女だからわたしの作家は未婚の少女でなければならないというわけでしょう。わたしいわく、アナタハソレデイイトシテモ、コノアタシハドウナルノ、アナタノ代理人トシテ作家ノ社会会的責任ヲ負ワサレルアタシノ立場ハ。作家、沈黙。」
（『わたしのなかのかれへ』所収「巫女とヒーロー」１８０ページ下段）

私（女性）の中の彼（男性）は、私・倉橋由美子から見ると男であるが、この彼から見ると二人称で呼ばれる作家は巫女である。この巫女は巫女たる私の中の彼女である。といふ等価交換の関係にある男性・女性であり、作家・巫女であり、倉橋由美子・《倉橋由美子》であると、最後の関係は安部公房の汎神論的存在論の記号を用ひればさう書くことのできる、これらの関係である。即ち、倉橋由美子の文学も超越論の、古典的な、古代からの日本の文学の正統に属してゐる。といふことは、古典的な、古代からの日本の文学の正統に則つて小説を書くならば、それはそのまま超越論の小説になるといふことです。

ここに安部公房による『聖少女』評を持つて来るとどうなるか：

「読者を不思議に硬質な認識に導いてくれるのは、方法として自覚されつくした、うその美学のせいにちがいな い。現に私は、この男女の関係を、いつの間にか、存在と本質の関係の物語として読みとっていたものである。」

安部公房の読者に於かれては、『他人の顔』が素顔・仮面論であり、この小説が「存在と本質の関係の物語」であることを知つてゐます。これは、安部公房の此の作品に関する正しい読みを示してゐる。

さうであれば、上の引用の前半の次の言葉、

「これは、はなはだ技巧的な、男女の葛藤の物語である。とつぜん、霧の中から湧いて出たような、記憶を失った少女。その少女の内部にせまり、実体を与え、自分のうちに接木しようと努力する青年。だが一切は、嘘という優美な刃物にほんろうされて、霧はますます深まってゆくばかりなのだ。」

といふ言葉は、少女をレモン色のカーテンの窓辺の依頼人に、青年をあの失踪した

探偵に置き換へれば、そのまま『聖少女』は『燃えつきた地図』になる。『聖少女』から見れば『燃えつきた地図』もまた作者の立場に立つと「はなはだ技巧的な、男女の葛藤の物語である。」といふことになります。

そして、しかし他方、安部公房の読者として誠に興味深いことには、トポロジー（位相幾何学）とコンピュータに関する次の愛読すべき書物についての発言のあることです。倉橋由美子は作家の型を二つに分類し、一つは世界中を冒険して経験のことごとくを記述し報告する「冒険する人間としての小説家」（例：開高健、小田実）、二つ目は「情報の大海をのみほす巨大な大脳そのもの、すなわちブッキッシュな意味での超人」です。倉橋由美子の選択するのは後者二つ目の作家の型です。次のやうに其の理想像を描いてゐます。「人間そつくり」ならぬ、安部公房そつくりです。：

「わたしが、年平均三百冊の本を読みながらあと三十年生きるとして、読める本はおそらく一万冊にみたないでしょうが、このなかにはすくなくともホメーロスや老子からフォン・ノイマンやN・ウィナーの著作集にいたる現存の情報がふくまれなければならず、今後出版される本のことも考えると、気の遠くなる話です。しかし、トポロジーからサイバネティックス、ディジタル・コンピューター、大脳生理学にいたるあらゆる知識と古今東西の文学、デモノロジーをおさめて丸ビルほどにふくれあがった大脳を考えてみると、これは壮観です。こんな怪物がそのあらゆる脳細胞を痙攣させてイマジネールな活動にむかったとき、どんな超文学が生まれるか、ぞくぞくする思いです。」
（『わたしのなかのかれへ』所収「巫女とヒーロー」１７９ページ）

しかし、一体私たちにとつて虚構・フィクションとは何なのでせうか。虚構・フィクションとは本来の日本語・やまとことばでは一体何といふのでせうか。以上書きたつて、その途上に感得したところによれば、私たちは古来これを、御話・おはなし、と呼んで来たのです。多分。何故なら、それは、コトのハ（葉）のハ（端）をなす（完成させる）即ち一筆書きで、トポロジーで物語を描くことだからです。それが、端・成しであり、端・為しである。私の理解は正しいか。

端・成しとは、大江健三郎の塔で引用した伊勢物語の初段のやうに「むかし、をとこ」で始まり、「むかし人は、かくいちはやきみやびをなん、しける。」と言葉をあはせて最初に再帰して終はる御話のことです。伊勢物語の最後の段、第百二十五段は次の通りで、この物語の全体を最初に再帰的に接続してゐる一筆書きの玉の緒は「むかし、をとこ」であることが判ります。かうしてみれば、呪文の繰り返しの深い意味も理解することができます。：

「むかし、をとこ、わづらひて、心地しぬべくおぼえければ、

つひにゆくみちとはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを」

4。倉橋由美子の小説観：『反小説論』

（以下次号に続く）

糞尿と性愛の文学

～生殖器・排泄器同一社会論仮説～

（３）

岩田英哉

１。古事記の中の糞尿と性愛

１.１ 神武初代天皇の皇后（きさき）の出生譚（２）

ネット・モナド論

（１６）

７.４.１ 中国の超限戦の手口について

岩田英哉

目次

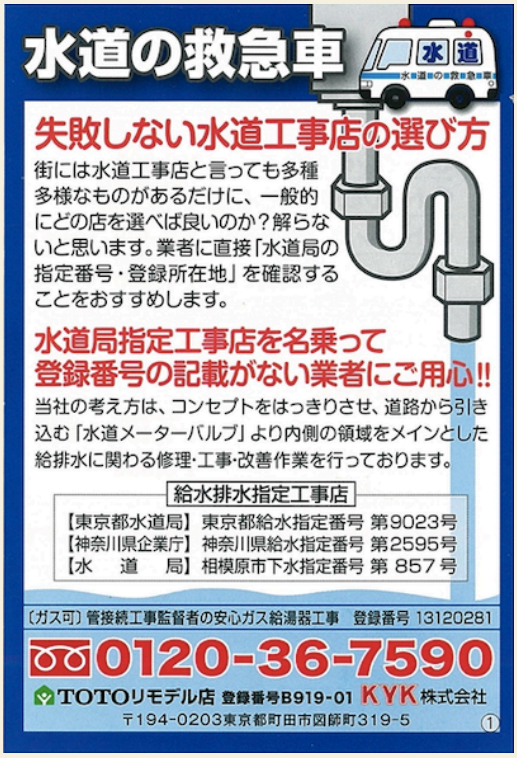
０。はじめに
１。国家とは何か
２。用語の定義
３。メディアとは何か
４。ネット・モナド論
５ 公私とは何か
６。二階層戦争論とメディア論の関係
７。政治形態と自由
７.１ 政治形態とは何か
７.２ 自由とは何か：私たちの自由およびlibertyとfreedomの違ひ
７.３ビルダーベルク会議とダヴォス会議と国家との関係
７.４ メディア・プロパガンダの構造
７.４.１ 中国の超限戦の手口について
７.５　政治形態EとAの公私：一神教のtopologyの政治形態
７.６ 政治形態Jの公私：高天原のtopology（超越論）の政治形態
８。経済形態と自由
８.１ 経済形態とは何か
８.２ 資本主義と政治形態Jを如何に一つにするか：江戸時代幕藩体制下の信用取引に学ぶ
８.３ ネット・メディアの役割
９。私たちは如何に生きるべきか
９.１ 学歴無用論：盛田昭夫著『学歴無用論』
９.２ 学問有用論：福沢諭吉著『学問のすすめ』
９.３ グローカリストとしての千利休と後裔たち（令和時代の人間像）

＊＊＊

７.４.１ 中国の超限戦の手口について

手口と書いたのは、これが実に卑近な方法であるからで、その手口が隣のドロドロだからです。まあ、ドロ棒の手口といつたやうな身近なものだからです。

これを此の連載の中に入れようと思つたのは、あなたはPJ（”Personal Journalist”）であることの、一種強ひられて生活をしてゐる状態の一端のブツとしての現れが此の小さな、郵便受けに入つてゐたチラシであり、さうでありながら、この小さな一枚の紙が今の政治的・経済的な日本といふ国家の全体を事実として示してゐるからです。まづチラシの裏表を掲げますので、ご覧ください。



この水道屋さんのウエッブサイトへ行つて調べると、勿論善意で仕事をしてゐて、世の中の困つてゐることのうち水廻りの悩みを独自の着想と技術で解決することを謳つてゐて、この会社自体に問題があるのではないことが解ります。経営者も歴とした日本人であつて中国人ではありません。ウエッブサイト：http://www.suidou24h.co.jp/company.html

しかし問題は、PayPayといふソフトバンクの決済サービスにあります。そして、この決済サービスと、このサービスの利用を、結果として成り立たせてゐる仕組みが上は都庁・県庁といふ地方と地元の官庁から制度であるものとして始まり、下には既存の体制を利用して、私たちの日常生活に此の通信技術を使つた決済サービスへの誘導が降りて来るといふこと、これが問題なのです。恐らく、決済サービスに関連して同種同類の事例は、探せば身の廻りに幾らもあることでせう。

このチラシから得た情報を一度抽象化し（帰納法）、次に個別の事例に当て嵌めて具体化して天地の間を往来して（演繹法）、物事の全体を眺めることにします。次のマトリクス「中国共産党の手口（一般）」が生まれる。ダウンロードは：https://bit.ly/2RyGmzW

もぐら通信

2021/05/29
Elya iwata

このマトリクスは継続的にアップデイトされる

中国共産党の手口（一般）
(v1)

植民地主義とは其処に摩擦・紛争（conflict）を起こして民を支配し、民の富を収奪することである。

											戦争	政治	法律	通信		
植民地主義		Conflict	戦略	時間の長さ	原理と技術	藝術	コンピュータ	インターネット	暴力	国家組織単位	戦争1	Conflict	Conflict	Conflict	[6＋N] G	
戦略	戦争	War	Strategy	長期	Science	Art 1	通信ネットワーク	インターネット4	Military forces	国家	戦争2	共産主義	現行日本国憲法・法律	大手通信事業・利便提供会社（通信事業会社・GAFA）	5G	グロ
戦術	戦闘	Battle	Tactics 1	中期	Skill 1	Art 2	インターネット	インターネット3		地方自治体	戦争3		地方自治体法・条例1		4G	
作戦1	戦闘1	combat	Tactics 2	短期1	Skill 2	Art 3	PC 1	インターネット2	Command	市町村	戦争4		市町村・条例2		3G	
作戦2	戦闘2	fight		短期2			PC 2	インターネット1	Forces	個人	戦争5			通信会社	2G	
							グローバリズム・共産主義・マルクス主義は皆、近代ヨーロッパの持つ矛盾が生み出した植民地主義の別称である。									

	経済	貨幣		決済	生活	文化	備考
G	Conflict	通貨1	ドル・EURO・人民元	Conflict	Conflict	Conflict	
	グローバリズム	通貨2	国家単位通貨1	決済1	マルクス主義	伝統と慣習の法1	
		通貨3	国家単位通貨2	決済2	ポリティカル・コレクトネス	伝統と慣習の法2	
		通貨4	国家単位通貨3	決済3		伝統と慣習の法3	
			国家単位通貨4	決済4	腐のドロドロ	伝統と慣習の法4	

この一般としてのマトリクスの中に個別具体的に会社名やサービス名を入れると、かうなります。これで一層、あなたが今の国際社会で日々何処にゐるかが判ります。ダウンロードは：https://bit.ly/3pydLY9

2021/05/29
Elya iwata

このマトリクスは継続的にアップデイトされる

中国共産党の手口（個別）
(v1)

植民地主義とは其処に摩擦・紛争（conflict）を起こして民を支配し、民の富を収奪することである。

											戦争	社会基盤	政治	法律	通信	
植民地主義		Conflict	戦略	時間の長さ	原理と技術	藝術	コンピュータ	インターネット	暴力	国家組織単位	戦争1	エネルギー・システムとネットワーク	Conflict	Conflict	Conflict	
戦略	戦争	War	Strategy	長期	Science	Art 1	通信ネットワーク	インターネット4	Military forces	国家	戦争2	電力網	中国共産党	現行日本国憲法・法律	ソフトバンク・楽天	
戦術	戦闘	Battle	Tactics 1	中期	Skill 1	Art 2	インターネット	インターネット3		地方自治体	戦争3	通信網		地方自治体法・条例1		
作戦1	戦闘1	combat	Tactics 2	短期1	Skill 2	Art 3	PC 1	インターネット2	Command	市町村	戦争4			市町村・条例2		
作戦2	戦闘2	fight		短期2			PC 2	インターネット1	Forces	個人	戦争5				PayPay	
							グローバリズム・共産主義・マルクス主義は皆、近代ヨーロッパの持つ矛盾が生み出した植民地主義の別称である。									

もぐら通信

通信		経済	貨幣		決済	生活	文化	備考
Conflict	[6＋N] G	Conflict	通貨１	ドル・EURO・人民元	Conflict	Conflict	Conflict	
ソフトバンク・楽天	5G	グローバリズム	通貨２	国家単位通貨１	決済１	マルクス主義	伝統と慣習の法１	
	4G		通貨３	国家単位通貨２	決済２	ポリティカル・コレクトネス	伝統と慣習の法２	
	3G		通貨４	国家単位通貨３	決済３		伝統と慣習の法３	
PayPay	2G	決済システム	通貨５	国家単位通貨４	決済４	水道修理	伝統と慣習の法４	

喬良・王湘穂共著『超限戦』（角川新書。坂井臣之助監修/劉埼訳）には、最後の「第八章　必要な原則」と題して、この題の元に次の８つの原則が掲げられてゐる。これが中国人民解放軍の無際限な戦線・フロントである。

（１）全方向度
（２）リアルタイム性
（３）有限の目標
（４）無限の手段
（５）非均衡
（６）最小の消耗
（７）多次元の協力
（８）全過程のコントロール

上掲のマトリクス二枚を見れば、これら８つの原則が現実的な問題として、あなたの日常生活の身辺にあることが、現下の対中国との戦争にあつて、よくわかることでせう。

２０世紀の戦争は軍事の専門家である軍人が戦争をしたが（これは国際条約によるものなので殺人ではない）、２１世紀の戦争は軍事の素人である民間人が戦争に直面してゐる。その最たるものが、現下の武漢ウイルスであり、これは中国共産党の仕掛けた細菌戦争です。従ひ、これが第三次世界大戦であつて（これは殺人である）、この中国の軍人が超限戦と名付けて始めた世界大戦は一層これまでの世界大戦よりも規模も適用範囲も広く、上記８つの戦争の原則から明らかなやうに、軍人のみならず、私たち庶民の階層で日常的に目に見えない戦闘が、５階層に亘つて幾つものカラム（列・項目）で発生してゐる。

中国は敵国である。これを明言できぬ政治家は次の選挙で落とすことです。今のやうな私欲についてのみ大変理解力と行動力に優れた政治家たちでは、私たち国民の命と生活が危ふい。我が身は我が手で守らねばなりません。

ですから、PJの仕事は、この超限戦下にあつて、

（1）全方向度
（2）リアルタイム性
（3）有限の目標
（4）無限の手段
（5）非均衡
（6）最小の消耗
（7）多次元の協力
（8）全過程のコントロール

これら８つの中国共産党の戦争手段として押し寄せて来る洪水の如き諸目的を、戦略的に強制・自発いづれにせよ、次のやうに逆方向に仕向けることを意味してゐる。上は国会議事堂の中の政治家と霞ヶ関の官僚から下は私たち庶民の一人一人に至るまでの日々の努力は次の８原則よりなる。敵国を中国以外の、国家の利害に関して敵対的反日国家に一般化して広げれば、敵性国家を巡るありとあらゆる物・事・人に関し、

（1）単方向度への誘導・強制と其の周知拡散と徹底
（2）リアルタイム性の断絶と遅延の増大
（3）無限の目標への誘導と周知拡散と其の徹底
（4）有限の手段への限りなき限定
（5）均衡の回復と維持
（6）最大の消耗と継続
（7）多次元の協力の否定と妨害及び単次元への誘導・強制と其の周知拡散と徹底
（8）全過程のコントロールの否定と妨害及び単過程への誘導・強制と其の周知拡散と徹底

いふまでもなく、我が国の政治家たちは誠に聡明・明智なる日本人ばかりでありますから、わたくしたちは日々有能にして勇気溢るる政治家たちを頼りにし、日本一高級なる大学を卒業したこれもまた一流の官僚たちばかりでありますから、私たちは何も恐れ憚ることなく、日々生きることができることを私は決して疑ひません。従ひまして、何を差し置きましても、

あなたの武運長久を祈ります。

追伸：あなたの教はつて来た日本人の退廃した道徳は今日限り捨てよ。あなたの頭はただ無目的に下げるためだけにあるのではない。昂然と高く掲げて敵と戦ふためにあるのだ。この敵の中には残念なることに他国にとつては一流である政治家も官僚も入つてゐる。

私の本棚

（３６）

木田元著『私の読書遍歴 猿飛佐助からハイデッガーへ』を読む

～安部公房の明治維新八百長説『榎本武揚』～

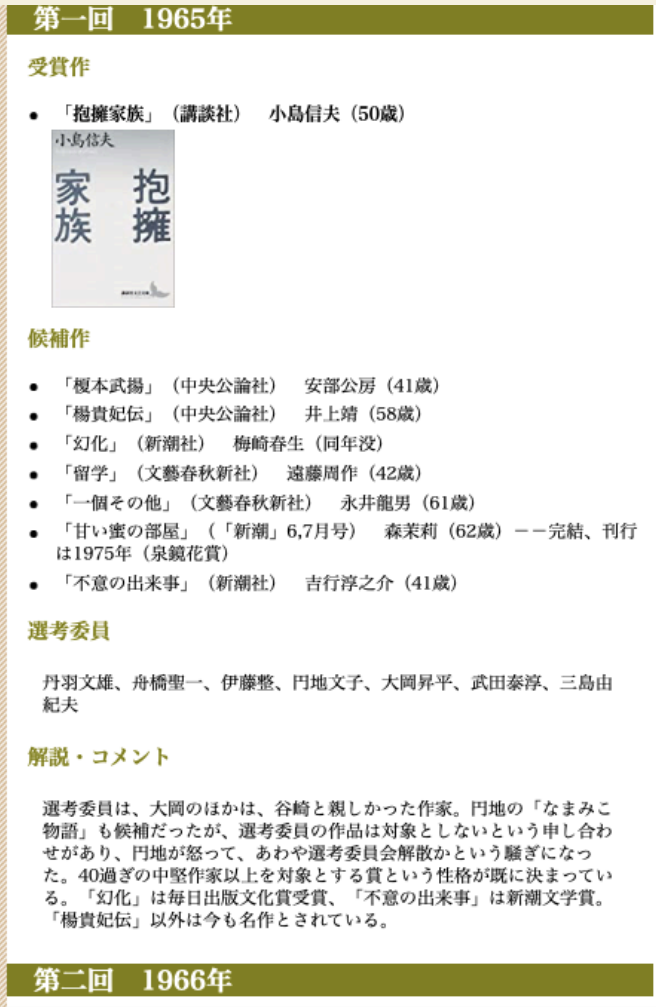
岩田英哉

木田元といふ此の方は哲学者の標記の本（岩波現代文庫）に、安部公房の小説『榎本武揚』についての感想と同感が述べてありましたので、この小説についての一評価として紹介しながら、同時に安部公房の文学の中での此の作品の位置を一読者として考へてみたい。

『榎本武揚』は、第一回の谷崎潤一郎賞（１９６５年）の最終候補に残りました。安部公房４１歳。受賞作とその他の方補作は次の通りです。この賞を軸にして時代の全体を見てもらふために、次のスクリーン・ショットを貼付します。

この小説に関する解説は、何故か普通に検索して出てくるWikipediaよりもGoo Wikipediaの方が遥かに詳しい。この方は非常によく安部公房と関連する資料を読み込んでゐる方です：https://wpedia.goo.ne.jp/wiki/

２年後安部公房は小説を戯曲に仕立てて、このGoo版Wikiによれば、「1967年（昭和42年）、『中央公論』2月号に掲載され、単行本は同年11月30日に河出書房新社より『戯曲 友達・榎本武揚』として刊行された。構成はプロローグと3幕。第22回芸術祭・文部大臣賞を受賞した。」（https://wpedia.goo.ne.j



第一回　1965年

受賞作

- 「抱擁家族」（講談社）　小島信夫（50歳）

候補作

- 「榎本武揚」（中央公論社）　安部公房（41歳）
- 「楊貴妃伝」（中央公論社）　井上靖（58歳）
- 「幻化」（新潮社）　梅崎春生（同年没）
- 「留学」（文藝春秋新社）　遠藤周作（42歳）
- 「一個その他」（文藝春秋新社）　永井龍男（61歳）
- 「甘い蜜の部屋」（「新潮」6,7月号）　森茉莉（62歳）――完結、刊行は1975年（泉鏡花賞）
- 「不意の出来事」（新潮社）　吉行淳之介（41歳）

選考委員

丹羽文雄、舟橋聖一、伊藤整、円地文子、大岡昇平、武田泰淳、三島由紀夫

解説・コメント

選考委員は、大岡のほかは、谷崎と親しかった作家。円地の「なまみこ物語」も候補だったが、選考委員の作品は対象としないという申し合わせがあり、円地が怒って、あわや選考委員会解散かという騒ぎになった。40過ぎの中堅作家以上を対象とする賞という性格が既に決まっている。「幻化」は毎日出版文化賞受賞、「不意の出来事」は新潮文学賞。「楊貴妃伝」以外は今も名作とされている。

第二回　1966年

安部公房の意図は勿論二者択一の二項対立で歴史を説明するのではなく、人間の生き方として超越論によつて第三の道を求めることにありますから、二項対立の歴史ならば例外なく勝者と敗者の歴史となり、英雄の歴史となるところを、榎本武揚は英雄といふ役割とは外れた歴史上の登場人物として敵でも味方でもない第三の道を行く男として描かれてゐます。安部公房曰く、

「思想と行動との関係を、その具体的な内容に即してとらえようとはせず、もっぱら忠誠は善、転向は悪と割り切ってしまう、明治以来の伝統的美徳だけは、どうやら左右を問わず、いまだに健在のままで生きのびているらしいのである。忠誠でもなく、裏切りでもない、第三の道というものはありえないのだろうか。」

この論理に木田元といふ哲学者は大いに共感したわけです。この共感を次のやうに書いてゐます。同書『暗黒事件』の章（１９６ページ）より：

「はじめてフォークナーのこの［引用者：『アブサロム・アブサロム』といふ］小説を読んだとき、読み終えて私は異様な感動に打たれ、数日呆然としていた。私はこれに似た感動を、バルザックの『暗黒事件』（水野亮訳、岩波文庫）と安部公房の『榎本武揚』（中央公論社）を読んだときにも味わった。」

そして、あらたに『榎本武揚』の章を立てて次のやうに続ける（１９８ページ～２０３ページ）：

「安部公房の『榎本武揚』もそうだ。この小説は、著者とおぼしき「私」が、昭和三〇年代の半ばごろ北海道旅行をし、釧路から汽車で二時間ばかりの厚岸（あつけし）という町に寄ったとき聞きこんだこんな話からはじまる。
（略）
作品の大半を占めるのはこの「顛末記」（引用者：「五人組顛末記」のこと）のことなのだが、ここに安部公房の特異な明治維新観がこめられていて実に面白い。私もかねて明治維新というのは一種の八百長革命ではなかったかと思っていた。徳川幕府があんなに無抵抗に政権を放棄したのは不思議な話である。だが、この『榎本武揚』を読んで謎の解ける思いがした。
　言われてみれば確かに、この時代に実際に欧米の地を踏んで、国際的視野、世界史的視点で物ごとを見ることができたのは、勝海舟や榎本武揚ら幕府の開明派だけであった。しかし、幕府の内部に身を置いて徳川三百年の体制をくつがえすには、彼らはあまりにも少数に過ぎた。薩長と戦い、しかもこの戦いに負ける以外、三百年来の封建体制はつきくずせない。彼らにとって、この戦いに勝つ必要はなかったのだ。むしろ勝っては困るのだ。薩長が勝っても、この戦いが終わり次第、薩摩藩、長州藩などというものは日本から姿を消してしまう。むしろこわいのは、英仏米露いずれであれ、外国勢力がこの戦に介入して来ることである。負けるが勝ち、これが戊辰戦争で勝や榎本の採った基本戦略だったのだ――と、こう言われると、すっかり納得させられてしまう。
　ここに描かれている榎本武揚像もまことに興味深い。豪放磊落、稀代の話し上手で、芝居気もあればとぼけて相手を煙に巻きもする。しかし、その榎本も後年福沢諭吉に変節漢呼ばわりされるのを苦にして勝海舟に名誉回復を依頼にいき、

うるさがられて門前払いをくわされたというから、どうやら勝の方が役者は一枚上だったらしい。当時の人たちの豪快でユーモラスな語り口がみごとに再現されてもいる。

だが、この小説でもっとも心に残ったのは、二門の大砲を引いて荒涼たる雪原の彼方に消えていった囚人たちの姿と彼らの足跡さえも消し去った茫々たる時間の流れであった。

どういうきっかけでかは忘れたが、フォークナーの『アブサロム・アブサロム』とバルザックの『暗黒事件』と安部公房の『榎本武揚』を比較的短い期間に読んだような気がする。あるいは、そうではなく、登場人物がすべて消え去り、むなしく時間だけが残るという主題の近似性から、遡行的錯覚でそんなふうに思うようになったのかもしれない。（略）

このころ、前に挙げたエドモンド・マニーの『小説と映画』も読んでいた。本業の哲学でも、ハイデッガー、フッサール、ベルグソン、サルトル、メルロ＝ポンティと私の読む哲学者はみな時間に強い関心を示している。哲学と文学にまたがる時間論のようなものを書いてみようかとおも思ったが、フッサールの時間論について論文を一篇書いただけで終わってしまった。」

この読書遍歴を読むと、この哲学者はハイデッガーに惹かれて著作を読み、なるほど一流の学者になるには、これ位複数の言語を習得し、夜も昼もなく一事に打ち込まねば人生はないのかと思ふほどの激しい修業時代の話が前半に書かれてゐます。同じ激しく精力的な勉学の仕方は、田中美知太郎氏のエッセイにも書いてありましたので、昔の人はこれ位勉強して当たり前であつたのでせう。上に挙げてゐるハイデッガー以下の著者の著作は、いふまでもなく、全て原語で読んでゐるのです。これについて、木田元氏曰く、

「というと、ずいぶんドイツ語が読めるようになったみたいだが、そうではない。『純粋理性批判』のような基本書（グルンド・ブーフ）をきちんと読んでおくと、それについての研究書・解釈書のようなものは、ほとんど辞書を引かずに読めるものなのである。ショーペンハウアーやニーチェのような特殊な思想家のものを除けば、哲学書の語彙なんて、ひどく少ないものなのだ。」（同書１４９ページ）この最後の一行は全くその通りです。

さて、第一回の谷崎賞で受賞できなかつた理由の全てではありませんが、大岡昇平の選評が『榎本武揚』の前半を褒め後半を褒めなかったことに、多分その一因ではあるでせう。同賞選評から大岡昇平のものを引用します：

「本年度随一の秀作　［第一回］

（略）

八つの候補作品から、『抱擁家族』と『榎本武揚』が残った。後者は着想も面白く、語り口にこの作者独特のとぼけた味があって、『中央公論』に連載中から注目していた。自由奔放な歴史小説の新型である。しかしこんど通読すると、作者は次第に最初の思いつきを維持するのが困難になったようで、その困難に負けてしまっている。後半は独特の語り口が空転するだけになったのは残念であった。」（筑摩書房版大岡昇平全集第２３巻２７０ページ）

余談ながら、同じ選考委員７名によつて戯曲『友達』が第三回谷崎賞（１９６７年）を、大江健三郎の『万延元年のフットボール』とともに、受賞してゐる。同時に最後まで残つた候補作の一つは、石川淳の『至福千年』です。また、この戯曲に対して、三島由紀夫の書いた「まことに羨望に堪へぬ作品である。」で始まる有名な『推薦文』も引きたいところですが、本題を逸脱する恐れが十分にありますので、読者は三島由紀夫全集に当たられたい。今私の手元にある『推薦文』は「劇団青年座パンフレット第３５号』（昭和４２年３月付）にある批評で長谷川四郎と磯田光一の二人の間に挟まれるやうに掲載されてゐるもので、河出書房新社『友達 榎本武揚』に「河出文藝選書　第３回配本付録」として挟まれてゐるものです。そこにある長谷川四郎の批評も磯田光一の批評も、日本語として、読むに値する優れたものです。

安部公房の理想とする人物像について、『榎本武揚』を巡つて次のインタヴューから引用して、読者の理解に供したい（『榎本武揚の英雄拒否　［聞き手］尾崎秀樹。全集第２１巻４３１ページ）。榎本武揚と勝海舟の人物比較論になつてゐますが、安部公房の好む人間像がはっきり出てゐます。

「安部　ぼくは非英雄に関心がありますからどうも企画には合わないかも知れないけど……。
――オレはこういうのがいちばん嫌いだというのは？
安部　英雄というものがほんとうにいたかどうかに疑問をもつんで、そもそもの意味でひじょうに懐疑的になるんです。英雄じゃない人物に興味がある。こんどの芝居に書いた榎本武揚などは、英雄になれない人物ですよ。英雄になった人々と質的に違うんですね。だから、ぼくは興味をもった。英雄になれるコースを歩みながら、英雄にならなかった人物です。同じタイプの人間としては、勝海舟がいますね。彼は榎本よりもっとその問題について、意識的でしたね。かくあるべしというはっきりした意図をもって、英雄の道を拒否している。あの人こそ、英雄になる気ならなっている人です。

それから感心するのは、人の批評をするのでも、彼の場合は偉かった、というわけです。とにかく、調べようと思っても資料一つ残していない。とぎれとぎれに仕事をしているだけで、それをつなぐ足どりははっきりつかめない。いや、りっぱな人だった、というような人物評価をします。本質的に英雄拒否ですよ。ぼくは、そういう思想は伝統的にあるんだということで、ある意味では明治の動乱期を見直すんです。
――ただ、勝海舟も晩年は、一言居士になりすぎているような気がしますが……。
安部　しかし、そういう方向自身が拒否されてくると、やはりイライラしてくるでしょうね。あまりにも、自分の抱いていた理想と現実がくいちがう。それから、自分が見通しているつもりで、予期しないものが、次々と展開されていくということで、自分が絶望していくということがあったと思います。」

この勝海舟評は、安部公房が自分自身について語つてゐるのだと見ることができます。特に「とにかく、調べようと思っても資料一つ残していない。とぎれとぎれに仕事をしているだけで、それをつなぐ足どりははっきりつかめない。」といふところとか、「あまりにも、自分の抱いていた理想と現実がくいちがう。それから、自分が見通しているつもりで、予期しないものが、次々と展開されていくということで、自分が絶望していくということがあったと思います。」といふ言葉に、安部公房の人生を想像してみることは無駄ではないでせう。

結局、安部公房といふ人間を理解する難しさ、大江健三郎の言葉でいへば「安部さんはやはり他の人間から見ると、それは僕も含めてですが、よく分かんないところのある人だったと思うんですね。ですから安部さんと親しい人のインタヴューというか、それがこの贋月報に載るわけですけれども、それを読んでいて、僕などからみても、ああ、この人は安部さんのことがほんとうによく分からないままで安部さんと付き合っていたという感じがする人が、非常にたくさんいます。むしろすべてそうだと思ってもいい、僕も含めてですね。」（『贋月報２１』全集第２１巻）といふことは、そばにゐる人たちに、たとへそれが家族であつても、さうであつたといふところに、余人の触れることのできない此の作家の心の機微があると思ひます。その機微の存在する場所を十代の安部公房は「心の中の部屋」と呼んでゐた（『中埜肇宛書簡第４信』全集第１巻７９ページ下段）。

結局、安部公房の理想の人間像は詩人の人間像であり、詩人の人間像としてはリルケの『マルテの手記』に戻り、『名もなき夜のために』（全集第１巻４８５ページ）に戻り、後者の理論篇たる『詩と詩人（意識と無意識）』（全集第１巻１０４ページ）に戻るのです。これについては初期安部公房論にて詳しく論証したと

ころです［註］。

［註］
初期安部公房については『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号から第５９号）をお読み下さい。

私の記憶では、安部公房は大岡昇平の名前を明示して、大岡の『榎本武揚』評に反発してゐましたので、どこかに大岡昇平の榎本武揚評が、谷崎賞選評以外にあるのではないかと思ひ、大岡昇平の批評と安部公房の反対批評を探しましたが、見つかりませんでした。

この作品を書いた安部公房の書斎の様子を、真知子夫人の弟である山田耕介が『贋月報１８』（全集第１８巻附録）で描いてゐるので引用します：

「仙川に移ってからは、書いているとき書斎に入ったことはないけど、いないときに入ったら、明治時代の新聞がたくさん積んであったのを見たなあ。漢文混じりのやつ。中外新聞とか明治時代の新聞が「榎本武揚」の中に引用されてるけども、そういうものだったのかなあ。新聞だけじゃなかったと思うけどもね。作家が資料そろえるのは当たり前だけどさ。あと原稿を床に何枚も並べてあるのね。姉に聞いたら、並べといて、あっち直したりこっち直したりするんだって。」

「原稿を床に何枚も並べて」、「あっち直したりこっち直したりする」といふ安部公房の姿は、如何にも位相幾何学の好きだつた安部公房らしいと思ひます。

縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く
（１６）

岩田英哉

目次

I 縄文紀元日本語論
１。日本語と漢語の関係

Intermezzo：何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？

２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か
３。五十音表を記号化する
４。日本人の言語宇宙
５。古事記の宇宙観
５.１ 高天原とは何か１
５.２ カミとは何か１
５.３ 高天原とは何か２
５.４ 日本語の特殊の中の普遍
５.５ 海の民のお祭りと超越論の関係
５.６ 天照大神とは何か
５.７ 月読命とは何か
５.７.１ 月とは何か
５.７.２ 月読命とは何か
５.７.３ 月読神社とは何か
５.７.４ ヤシロとは何か
５.７.５「鹿座神影図」を読み解く
５.７.６ 磐座と注連縄の関係
５.７.７ 亀の甲羅とは何か
５.７.８ 習合とは何か
５.８ カタカナとひらかなの関係

Intermezzo２：海凪之大刀（アマナギ・ノ・タチ）は一体どんな姿をしてゐるのか

５.９ 日本位相習合史
５.１０ 何故国家は単数または複数の神とともに生まれるのか
５.１１ かごめかごめの歌は一体何を歌つてゐるのか
５.１２ 縄文土偶とは一体何か
５.１３ 習合といふ漢意をやまとこころで何といふのか
５.１３.１ 位相史のための紀元の分類
５.１３.２ 淤能碁呂島とは何か
５.１５ 縄文土器とは何か
５.１６ 大祓へを読み解く
５.１６.１ 何故私たちは御祓を必要とするのか
５.１６.２ 大祓へに唱へられる「聞こし召す」とは何か

５.１６.３「聞こし召す」前に「しろし召す」がある
（１）第一段：高天原八百万神大祓ひ会議
（２）第二段：大倭日高見国内の天津罪と国津罪の分類と大祓
（３）第三段：大倭日高見国は大祓の結果どうなつたか
５.１６.４ 八の音義は何を意味するか
５.１６.５ 誰が「しろし召し」誰が「聞こし召す」のか
５.１７ 紫式部の超越論『源氏物語』
５.１８ 「蟲めづる姫君」はカタカナとひらかなを如何に使ひ分けてゐるか
５.１９ ダイダラボッチと巨人伝説：大倭日高見国と播磨国：房総半島と瀬戸内海の交流の歴史
５.２０ 日本人はどこから来たか

青字は既論の章、赤字 は今回論ずる章、黒字は此れから論じる章

5.1 6.4 八の音義は何を意味するか（4）
5.1 6.5 誰が「しろし召し」誰が「聞こし召す」のか
5.1 7 紫式部の超越論『源氏物語』
5.1 8 「蟲めづる姫君」はカタカナとひらかなを如何に使ひ分けてゐるか
5.1 9 ダイダラボッチと巨人伝説：大倭日高見国と播磨国：房総半島と瀬戸内海の交流の歴史
5.2 0 日本人はどこから来たか

＊＊＊

目次

5.1 6.4 八の音義は何を意味するか（4）
A 箱根神社の三柱の御祭神の名前
B それでは、瓊瓊杵尊は一体どこから天下つて来たのか
C 最初の瓊瓊杵尊は、何処からミコトを持ち運んで来たのか
D 何故日本の国は古事記と日本書紀といふ二種類の書物を必要としたのか
E カミとミコトとヒトの違ひと同じであることについて
F 国学とLiberal Artsの統一と普遍学［universal science］としての日本学［Japanology］の成立
G 日本書紀にある「神武天皇より数へて」「今に一百七十九万二千四百七十余歳」とある皇統の長さ（９０万年）は何を意味するか
H 古代の天皇の寿命の長さは何を意味するのか
I 国学の超越論：賀茂真淵と本居宣長の超越論
J 道元禅師の超越論
K 親鸞聖人の超越論
L 八岐大蛇とは何か
M カミとは何か再説
N シロし・召すとキコし・召す再説
O 大祓に書かれてゐる場所はどのやうな場所であるか
P 日本語の音義とひらかな・カタカナ・漢字の関係
Q 国学言語論と欧米言語学の関係

＊＊＊

5.1 6.4 八の音義は何を意味するか（5）

賀茂真淵と本居宣長のといふ二人の国学者の超越論を前章で理解して下さつたならば（理屈は難しくなかつた筈です）、道元禅師の超越論も全く変はらぬものですので、理解が容易です。片や国学、片や仏教の禅宗といふので違ふのではないかと思ふかも知れませんが、日本列島の上では何もかもが、時代を超えて（これも超越論といはむや）、縦のものが横になつて、同じ平面の上に同列に並びます。

『正法眼蔵』のうちの「現成公按」の初めの方より次の段落を引用します。この引用の冒頭を写してゐると、安部公房の読者たるあなたにはきつと、ああ、道元禅師はS・カルマ氏であると思はれることだらうと確信しましたので、以下これはS・カルマ氏のいふ言葉だと思つて読んで下さい。さうしたら、少しも難しくありません。『S・カルマ氏の犯罪』といふ小説の中でS・カルマ氏が其のやうな存在として犯罪者であるならば、道元禅師もまた犯罪者だといふことになり、そんな馬鹿なことがあるわけがないと思つて後者を肯定するならば、やはり前者もまた肯定することになる。否、道元禅師もまた両極端を排した第三の道を仏道と呼んで只管打座を実践した。ここで心に留めて欲しい言葉は、再帰的(recursive・リカーシヴ）とか再帰性（recursiveness・リカーシヴネス）といふ言葉です。この道元禅師の身心脱落に関する説明は、現代のAIにまで及んでゐます（この問題はここでは論じません）。要するに安部公房の世界、

汎神論的存在論の世界であり、要するに、S・カルマ氏の世界であります。読者によつては『名もなき夜のために』といふ初期安部公房の美しい、リルケを下敷きにした名品を想ひ出す読者もゐるでせう。以下日本古典文学大系『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』（１０２ページ～１０３ページ）からの引用です：

「佛道をならふといふは自己をならふ也。自己をならふといふは自己をわするゝなり。自己をわするゝといふは、萬法に證せらるゝなり。萬法に證せらるゝといふは、自己の身心ををよび他己（たこ）の身心をして脱落せしむるなり。
　悟迹（ごしやく）の休歇（キウケツ）なるあり、休歇なる悟迹を長々出（ちやうちやうしゆつ）ならしむ。」

「自己をならふ」といふことが再帰的であるといふことです。自己は自己に戻る。といふ円環をなし、メビウスの環をなしてゐる。仏道を修業するのは人間ですから、人間はS・カルマ氏のやうに再帰的な存在であるといつてゐるのです。従ひ、自分自身である自己が自己にならふといふこと、即ち自己Aと自己A’と二つのならひ・ならはれる自己を呼ぶとすると、どちらがどちらなのか？ととへば、あなたには既にこれがS・カルマ氏の世界であることに気づくでせう。壁がS・カルマ氏か、S・カルマ氏が壁なのか。もはや此処で安部公房の読者であればこれ以上の解説は不要なのですが、それでは余りに身も蓋もないので、話を続けます。自己Aと自己A’は、即ち複製の関係にあり、また等価交換の世界にある。

さう、自己が自己にならふと、即ち或る朝目覚めて見ると、「いつの間にか」（これが超越論）自分の名前を忘れてしまつてゐる。あなたは名前を失つて、時間の中にゐるにも拘らず、無名の存在になつてゐる。会社に出社すると、既に・最初から（これも超越論）、あなたが自分のいつもの机に座つて仕事をしてゐる。しかし、よく目を凝らして見れば、それはあなたの名前の書かれた名刺である。しかし、職場の同僚たちは上司も含めて皆、名刺に話しかけて、あなたは誰の目にも入らぬやうである。あなたが名刺なのか名刺があなたのか。すつかり、あなたがあなたであることを忘却するのみならず、周囲の誰もがあなたが目に入らない。これが、言葉と存在とヒトの関係であるので、道元禅師は「自己をわするゝといふは、萬法に證せらるゝなり。萬法に證せらるゝといふは、自己の身心ををよび他己（たこ）の身心をして脱落せしむるなり。」とおつしやつてゐる。萬法とは、仏法に限らぬ形而上的な諸法と解してもよく、仏法の及ぶ限りの全ての法と解してもよい。いづれにせよ、前章で国学者二人の証明したる通りの、そしてあなたにも四季歴として普段実感されもして現実がさうである通りの、認識論（賀茂真淵の間色・空間的超越論）と存在論（本居宣長の時間単位等価交換・時間的超越論）といふ、これは「萬法に證せらるゝ」事実である。これによりて、「萬法に證せらるゝといふは」何かといへば、言葉を替へて云へば、「自己の身心ををよび他己（たこ）の身心をして脱落せしむる」といふことである。「脱落せしむる」とは、かくも、忘却によつて自己・他己の境界が失はれることであり、

逆にいへば此の境界識がなくなるので、忘却といふことになる。S・カルマ氏のやうに「自己の身心ををよび他己（たこ）の身心」が安部公房の存在論の記号を用いて表せば《脱落》するのである。身心が脱落するのではない。身心が《脱落》するのである。

この後に挿入されてゐる言葉を、この本の註釈されてゐる解釈の言葉で置き換へると次のやうになります。

悟りの跡（悟迹）といふものは全く跡がない。跡がない悟りの跡が存在するといふこと、これが真実の姿であるから、「長々出（ちやうちやうしゆつ）」として、即ち永遠に、悟りの跡（悟迹）は存在しないのである。

この悟りの跡が残らないといふ跡とは、自分の名前を忘れてしまふことによつて自己喪失をし、記憶を失ふことによつて、時間の中に名前を呼ばれて毎日記憶されて生きてゐた現存在としてのS・カルマ氏が、存在として生きること、即ち、S・カルマ氏が《S・カルマ氏》に変形することだといへば、あなたには自づと理解される筈です。あるひは、『デンドロカカリヤ』の主人公コモン君が《コモン君》となつて名前を失ひ、デンドロカカリヤといふこの世の名前を喪失して、デンドロカカリヤと呼ばれる存在となるといふ作品を想ひ出してくださつても良い。他にも、さうすると、幾つも幾つも安部公房の作品が思ひ出される。道元禅師は『赤い繭』の主人公なのです。ただし、禅僧ですから、『赤い繭』の主人公のやうに自分の家を求めて道を行くことはなく、座禅に打ち込むことによつて、内部と外部を等価交換して余剰といふ富を産み出して、自己再帰的に空虚な赤い繭に変形する。この境地に至つては、もはや、赤い繭が禅師なのか、禅師が赤い繭であるのかの識別はできない。

赤い繭が《道元禅師》なのか、道元禅師が《赤い繭》なのかの識別はできない。

と、このやうに汎神論的存在論の安部公房の記号を用いて表記すれば、一層この事実は明らかです。

この等価交換の境域にゐる個人が、時間の中に現存在してゐるにも拘らず、存在であることを《身心脱落》といふのです。西洋哲学用語と概念で説明するとかうなる。

この境域を、安部公房は周辺飛行と呼び（何故ならモノ・コトの周辺を謎るから）、またこの《身心脱落》の状態をニュートラル・neutralと呼んで、この生理的な感覚からいつでも両極端の現存在（例：身と心）を往復できるやうな、身と心の交差点に常にゐることから生まれる演技に至るまでの訓練を俳優たちに施しました。この演技指導論の詳細は別途『周辺飛行論』で連載して論じてゐる通りです。別途論じ続けてゐる『縄文紀元論』では、これを私たちは縄文紀元以来（しかし起源は最古の縄文土器発見のそれ以前から）、《ヤ》の音義の意味するところとして、その形象とともに、

抽象から具象に至るまで、これも詳細に論じて来たところです。道元禅師の言葉は続きます。

「人、はじめて法をもとむるとき、はるかに法の邊際（へんざい）を離却せり。法すでにをのれに正傳（しやうでん）するとき、すみやかに本分人なり。」

この短い段落は、S・カルマ氏について既述のところを、自己・他己と身心脱落の視点からではなく、法といふことは当然に仏法といふ法の視点から、同じことを説いたものです。身心脱落を、法の視点から眺めれば、人は、（そしてここが大事ですが初心者として）「はじめて法をもとむるとき」、「すでに」（これが超越論です）「はるかに法の邊際」即ち其の周辺・際・ヘリ・フチを離れて却してゐる。却とは忘却の却です。即ち、今の言葉でもつとはつきり言へば、法の限界を超えてゐる。即ち、仏法に限界のないことを「すでに」知つてゐるのである。それ故に、「法すでにをのれに正傳（しやうでん）する」と云へるのであり、この時「すみやかに」（これは大祓や古事記にある神々の名に呼ばれてゐるハヤ（速や）と同義ですーこの副詞も超越論）、即ち時の間なく時間なく、逆にいへば其の隙間にあつて最初からそもそもーこれが「法すでに〜するとき」の意味ー「本分人なり」、人が本分、即ち存在として本来の面目たり得てゐるのであり、この本来の面目即ち人の在り方に於いて人は本分自体であり、前述のところでいつたことを繰り返せば、本分は本分にならふといふこと、人の自己は自己をならふといふこと、即ち「佛道をならふといふは自己をならふ」といふ私の言葉の意味であり、このならひをすれば、人は仏道のミチ（道）自体であり、「本分人なり」といふことができる。続けて、道元禅師曰く、

「人、舟にのりてゆくに、めをめぐらしてきしをみれば、きしのうつるとあやまる。目をしたしく舟につくれば、ふねのすゝむをしるがごとく、身心を亂想して萬法を辯肯（ハンケン）するには、自心自性（じしんじしやう）は常住なるかとあやまる。もし行李（あんり）をしたしくして箇裏（こり）に歸（き）すれば、萬法のわれにあらぬ道理あきらけし。」

最初の一行と同じ経験は、舟の上でなくとも、陸上で汽車に乗つて列車の動く時に思はず駅の方が動いたかと思ふ誤解・錯誤にもあるでせう。舟に乗つて岸辺をみやれば、岸が動いてゐるかと錯覚する。目をよく舟に向ければ、即ち舟を主体に意識して見れば、それはやはり舟が動いてゐるのであると判ります。この舟にゐて岸をみやる私のありやうを岸主体で「自心自性は常住な」りと思へば、これが錯覚なのである。さうではなく、正反対に、自心自性は常住ならず、舟のやうに時間の川を流れてゐる。あなたは実は不住であり、不常住である。ひとときとして同じところにはゐないのです。もし行李（あんり）即ち「日常の行為の一切」（註による）を、この舟にゐて対象が動いてゐると勘違ひすることと同じ此のことを、一般化した仏教用語でいへば「箇裏（こり）」のせいに帰するならば、そのやうな人には萬法である仏法はないといふことは、物事の道理として明らかでありませう。箇とは『字統』によれば、「も

のをかぞえる・ものをさす」意とあり（同書８０ページ）、従い舟の上で、岸辺を指して岸辺が動いてゐると発声しまたは思ふことをいふ。其のやうな裏（うち）には、真理はない。と、道元は言つてゐる。これが「箇裏（こり）」の意味です。要するに、

モノ・コトを見る主体である自己のゐる場所に再帰して、よくモノ・コトを観なさい

と、道元はいつてゐる。このやうに再帰といふ言葉を私が此処で使へるといふことは、これは道元の理屈のみならず、実際の深い経験でもあることを意味してゐます。

見るとは時間の中でミルこと。観るとは時間の外でミルこと。後者は時間を捨象して、さういふ意味では変化を捨てて変化にとらはれずに、ものの関係を観なさいといつてゐるのです。芭蕉ならば、不易と流行といつた問題です。道元は不易につけといつてゐることになります。さて、このやうに論じて来た上で、次に、よくモノ・コトを観るとはどういふことかについて、道元は更に次の例を挙げて説明してゐますが、これは賀茂真淵の認識論（間色論）と本居宣長の存在論（等価交換論）の統合した論です。道元さんはこれが仏法だと言つてゐる。要するに間色については季節の変化点（スキマ）に着眼せよといつてゐる。等価交換論については、これは単位であり（道元さんは仏僧であるのでこの単位を法位と呼んでゐる。宣長さんは神道なので同じ単位を神代と此の世のヨと呼んでゐる）、これを萬の法である佛法との関係で次のやうに説明してゐます。

「たき木、はいとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。しかあるを炭はのち、薪（たきぎ）はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのちあり。前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちありさきあり、かのたき木、はいとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生（しやう）とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、佛法のさだまれるならひなり。このゆへに不生（ふしやう）といふ。死の生（しやう）にならざる、法輪（はふりん）のさだまれる佛轉（ぶつてん）なり。このゆへに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり。たとへば、冬と春とのごとし。冬の春となる。とおもはず、春の夏となるといはぬなり。」

薪→灰の変化は時間の中では不可逆である。従ひ、薪には薪の位があつて動かない、舟にゐるあなたのやうに動かない。舟が一艘二艘といふ単位であるのと同様に、これは法の位であり、萬の法の単位・unitであるからには、時間の先後はない。しかし、薪と灰を並べてみて空間の前後があるとおもふかも知れないが、さうではない。単位であるからには、実は空間の前後もないのである。要するに時間の中で変化してゐるやうに見える薪と灰とはそれぞれが異なる単位に常住して不動であるのだから、「前後際断せり」といふのだ。即ち「灰は灰の法位にありて」、単位として「のちありさきあり」といへるのであつて、しかし「かのたき木、はいとなりぬるのち、さらに薪とならざる」ものである。即ち「前後際断せり」と、それ故に、私はいふのである。灰と薪とは異なる単位なのだ。灰も薪も単位の名前である。へリ・フチ・囲ひ・周囲・へ巡りの名前である。

一筆書きで書いた周囲の名前、注連縄の名前である。

生と死も、従ひ、同じことである。生も初めが終りになる一つの単位であり、死もまた同様の一つの単位である。ここに、それぞれがそれぞれであつて、これを「法輪のさだまれる佛轉なり」といふのである。「このゆへに」生は単位として不動であるから生まれることはなく、それ故に「不生」といひ、「不滅といふ。」「生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり。」「たとへば、冬と春とのごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるとはいはぬなり。」即ち、季節の変りメに連続性はない。

四季の変りメ・目に着眼して、この隙間に真理の存在を観る賀茂真淵に対して、道元禅師は、同じ着眼ながらも、「前後際断」してこの季節の隙間をそのままとし、季節自体を単位として独立させて、時間の変化にある単位を不動のものとして、これを仏法の立場から法位と呼んでゐます。ここが、本居宣長と異なるのは、法位の等価交換をしないことですが、これはやはり単位化された季節の内部には時間が存在して変化が現ニ存在するわけですから（現存在）、単位の価値が異なると考へたからでせう。宣長の場合の等価交換論の対象は、此世と神世ですが、この論理を敷衍して普段の生活に降ろしてくれば、四季の季節同士の等価交換も理屈の上では成り立つ筈ですが、しかし、それが成り立たないのは、やはり四季が独立してゐるからだと実は私たちは実感してゐるからではないでせうか。それで、道元さんもしなかつたし、できなかつた。事実は事実として置いておいたといふことになります。

かうしてみますと、どうやら私たちの国学も禅学も、共通して時間の中で季節の境目・隙間を認識する認識論ですが、四季については等価交換は考へることができないと考へてゐるが、季節以外のモノとコトについては一筆書きで等価交換できるものがあればそれはすることができると考へてゐる民族・peopleだといふことになります。万葉集と古事記と仏法の世界でさうならば、日本列島の上ではこれからも未来永劫変はることなく、これが私たちの自然観であり、ミコト（御事・御言）観であるといふことになりませう。

水には水の法位あり、月には月の法位あり。この法位の独立、これは万事万物の御言・ミコトのうち自然の風流に関するミコトでありますから、このミコト・御事について、上記の引用の後に続けて、

人の悟（さとり）をうる、水に月のやどるがごとし。月ぬれず、水やぶれず。

と、禅師はおつしやつてゐます。

道元禅師が、ここで水といひ月といつて、これらそれぞれの言葉を単位または法位だ

と考へてゐることは、実は、水といふ（言葉の）概念を一つの単位として、月といふ（言葉の）概念を一つの単位としてゐるといふことですから、これは単位同士の言葉の意味の総体として互ひに等価であるといふことをいつてゐるのですから、コト・タマといふタマのことを述べてゐるのです。水と月といふ言の端が、ここでも二つで一つのタマ、即ちコト・タマになつてゐる。コト・タマは関係概念です。言霊と書かないのは、これが漢字の文字面に読み手が引きずり廻されて、やまとこころが失はれるからです。これを音読みしてゲンレイなどと読むとコト・タマから大きく外れて正しく日本人としてものを考へることができない。このやうに、さて、私が概念とこれまで言つてきたことは、みなコト・タマの意味に同じです。それ故に、コト・タマは連鎖する。何故なら、本居宣長の日本語文法論にある通りに、私たちの日本語は玉の緒でできてゐて、タマ（言葉・語）と緒（接続辞ー助詞・助動詞）でできてゐる。といふことは同時に、確かに賀茂真淵と本居宣長の、前者の季節の変化の隙間を読むこと（認識論）、後者の神代と此の世の等価交換して時間をズラし移すこと（存在論）、この二人の超越論は、一対のタマであり、連鎖であり、結びになつてゐる。

さて、また四季がかやうに独立した単位であり、また法位であり、萬法によるものであるので、私たちはこの四季に関する言葉を季語と呼び、分類して季節を詠む指標・indexとして、俳諧といひ、連句といつて歌仙を巻く。指標があなたに馴染みのない難しい単位であり概念であれば、シルシ・印・標・徴・兆・章・験・瑞・識として、キザシ・微・萌・兆として読む。月をそのやうなものとして読み（月読み）。コ・来をそのやうなものとして読む（コ読み）。また一行詩としての俳句をシルシとキザシで詠む。和歌もまた季節をシルシやキザシで詠むことと、以上の認識論であり且つ存在論である超越論は詩と一体となつてゐて、これがこのまま、その５・７・５の形式によつて、同じ奇数の世界である高天原に、自然のままにミコト（命）のままに（大祓第一段にある「命以（みことをもちて」）、私たちに知られぬうちに奉納されてゐることは既述の通りです。

国津の世界では、交差点を詠み、また其処にヤ・シロを建て、四季といふこれも偶数の世界に生きる私たちであります。何故、私たちはこんなに季節の移り変はりを愛でるものか、この太古・古代以来の事実を説明することがどれだけ、この章で言語化できたものか。しかし、考へて見れば、四季とともに、四季の移り変はりの中でまた外で、私たちの生活は誠にあらゆる意味に於いて、私たちの生活と人生のあらゆる点に於いて、誠に深いものがあります。

この日本人の哲学であり形而上学である自然観・ミコト観に生きる限り、私たちの生活は安泰であり平安であり、個人が一人一人さうであるならば、日本の国もまた平安であり安泰であると私は信じます。これも論考中のどこかに書いた通り、日本の歴史は和歌の歴史であり（太古・古代以降）、連歌の歴史であり（平安時代末・鎌倉時代以降）、俳諧・連句の歴史であり（江戸時代以降）、俳句の歴史である（明治時代以降）。これが海外の諸外国と全く異質なる私たちの歴史の本流です。

詩文といふものを抜きに、我が国の歴史を論ずることはできません。従ひ、国の内外を問はず歴史家もその他の学者もその他の論者も、日本の歴史を論じたいと思ふならば、和歌からこのやうに他の詩の形式が生まれたのである以上、何よりもまづ、和歌を解するこころを必要とします。

宣長さんのいふ通りに巧拙は問はず、あなたも四季折々に普段に歌を詠んでは如何か。四季歴に従ふ季節をヨム（読む）こころ（色・読み）、コ（来）を読むこころ（コ・読み）が、私たちの超越論の実践だからです。和歌を読むことに於いて、私たちの形而上学と生活の間に乖離なく、天津の世界と国津の世界の両方に二重写しに生きる私たちは幸せです。此世と神世の間に逕庭はない。私たちはミコト持ちでありまたカミである。これをコト・タマの幸きはふ国といふのです。

さて、賀茂真淵、本居宣長、道元禅師と来て、三人の超越論を通覧したので、ここで最前の超越論の定義をあらたにしたい。

超越論の定義２
超越論とは、両極端を否定して、スキ間・凹に着目し、または時間を単位化して等価交換することによつて第三の解法をヒトの道として求めることである。但し、四季は互ひに等価交換ができない。

［補足説明］
最初のスキ間に着目するといふのは、賀茂真淵の四季歴認識論。次の「時間を単位化して等価交換する」のは、本居宣長と道元禅師の価値論としての存在論。宣長の超越論は神世と此世の等価交換、道元禅師の超越論は、四季独立・両端際断論。後者の超越論は、月と水の関係を論じる論じ方を見ても、季節といふ時間のみならず、空間的な認識にも及んでゐる。月が存在するから私に月が見えるのか、それとも私がミルから月が存在するのかといふアインシュタインの問に対して、私たち日本人の四季暦超越論は、後者をとつてゐることになる。アインシュタインは相対性理論で後者をとつた。さうでなければ、量子力学は生まれなかつた。私たちヒトが時間の中で物を見るとズレる。隙間が有る。安部公房の撮影した一見ボケてみえる輪郭の二重三重にズレた次の写真のやうに（例：全集第１５巻表表紙裏の写真その他）。

従ひ、真淵のいふ四季の変化の隙間・ズレを観よといふ超越論に対して、大陸の人々は春夏秋冬の正面（せいめん）をのみを見るので、超越論を理解することができないといふ難があるのは、ヨーロッパもアメリカも同じ。日本人は明治維新以来１５０年余、これに振り廻されて右往左往して来たのは、学問に留まらず、学問の世界がさうならば、政治・経済の世界もみな同じである。私は名も無い庶民だけが堅実な保守であつたと思ふ。

まとめると：

「超越論とは、両極端を否定して、スキ間・凹に着目し」とあるのは、認識論。「時間を単位化して等価交換すること」は存在論です。認識が先、観ること・見ることが先、その後に月は存在する。近代ヨーロッパの科学は、私たちとは正反対に順序が逆で、月が存在するから目に見えると考へてゐる物質の世界。それ故に、時間の本質が、日本人のやうには、理解ができない。

まとめると：

超越論の定義０
世界は差異である（認識論）
価値は等価で遍在する（存在論）

最初の差異認識論の中には真淵の間色論が含まれており、二つ目の価値遍在論には、宣長の神世人世等価交換論が含まれてゐる。道元禅師の超越論は、これら二つに跨つてゐる。

さて、といふことになれば、私たちのいよいよ明らかになる超越論を基礎において、カミである私たちの、ミコト持ちとしてのカミ概念とは如何なるものかを再度次の章にて、更に論じたいと、さう思ひましたが、しかし、道元禅師を観たならば、同じ時代の親鸞聖人の超越論も観てみたいと思ひますので、折角ですから、あと一章を鎌倉仏教の超越論に割いて、そのあとにカミとは何かを再説します。

K　親鸞聖人の超越論

（次号に続く）

Topologyで日本の文化を解説する「内なる辺境シリーズ」

（１２）

扇

岩田英哉

あふぐなら　いぶきどのかみ　ゐたちなむ　たれもかれもが　みなかみがゆゑ

編集後記

●巻頭詩（１８）若やいだ夜：ボルヘス：久しぶりのボルヘスの詩を掲げました。やはり最後の一行に存在論の記号をボルヘスのものとして用ひてゐますので、安部公房の読者には既に理解は容易です。

●周辺飛行（４２）：３。『周辺飛行』について（２１）：周辺飛行４０―蓄音機：まあ、なんともうしませうか。山頭火の句に、どこまで行つても青い山といふのがありましたが、どこまで行つても安部公房です。

●二十一世紀の日本文学のためのスケッチ・ブック（１２）：安部公房の塔と倉橋由美子の塔（２）：これで、学生時代に読んで以来ずつと気になつてゐた倉橋由美子の文学史上の位置を確定することができたことに安堵してゐます。

●ネット・モナド論（１６）：７.４.１　中国の超限戦の手口について：この超限戦理論に対抗する理論を日本政府率先して練らねばならぬものを、何を呑気にしてゐるのか。何よりも軍人は何をしてゐるのか？防衛大臣は何をしてゐるのか？超限度の戦争ですから、あらゆる分野から専門家を集めて会議を開いて対抗・打ち消し戦略理論を打ち立てるべき場合が昨日です。

●私の本棚（３６）：木田元著『私の読書遍歴　猿飛佐助からハイデッガーへ』を読む～安部公房の明治維新八百長説『榎本武揚』～：木田元さんといふ方の榎本武揚論は、そのまま私たちのこの作品に対する理解を深めますので、良い書評でありました。木田さんに感謝致します。

８　縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（１５）：５.１６.４　八の音義は何を意味するか（４）：J　道元禅師の超越論：まあ、毒をくらはば皿までといふことで、次回は親鸞聖人です。私たちの超越論から生まれた道徳論が悪人正機説なのかも知れません。吟味は次号にて。

●では、また、次号

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館
「何處にも無い圖書館」

【もぐら通信の編集方針】

１．もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
２．もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
３．もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。
４．編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。